JAPAN RUGBY ANNUAL REPORT 2025

JAPAN RUGBY

公益財団法人日本ラグビーフットボール協会

私とコアバリュー

ラグビー憲章の中でラグビーが有する価値として
5つのコアバリュー「品位・情熱・結束・規律・尊重」が紹介されています。
コアバリューは、選手、指導者、トレーナー、メディカル、レフリー、スタッフ、関係者、ファンなど、
ラグビーに関わる全ての人に大切にしてほしい基本となる考え方、価値観です。

品位 INTEGRITY

尊重 RESPECT

情熱 PASSION

規律 DISCIPLINE

結束 SOLIDARITY

尊重 山梨学院大学 教授・ラグビー部監督 | **梶原 宏之**

私は、全力で強烈なタックルをしてくる勇気ある相手にこそ、尊敬の念が湧き、リスペクトできました。正々堂々と戦い、レフリーの判定を受け入れ、礼節を守ることは自身の成長に繋がります。また、指導者やスタッフ、観客、保護者、運営陣など周囲への感謝と敬意も大切です。尊重の心が競技の価値と誇りを守り、将来の人生にも大きな価値をもたらします。

尊重 クボタスピアーズ 船橋・東京ベイ | **立川 理道**

強いチームには、互いを尊重する文化があります。年齢や立場、経験が違っても、一人ひとりの考えや役割に価値があります。仲間を信じ、対戦相手を敬い、レフリーの判断を受け入れる。その積み重ねが信頼を生み、チームを前に進めます。尊重とは相手を認め、責任を持って向き合うこと。この姿勢は、競技を離れた人生においても大切な財産になると思います。

規律 横河レンタ・リース 株式会社 | **南 早紀**

「偉大な選手である前に、偉大な人間であれ」という言葉があります。私生活から細部に気づき行動できる選手こそ、試合の緊張下でも主体的に役割を全うできると思っています。

品位 ナナイロプリズム福岡 コーチングディレクター | **桑水流 裕策**

オリンピック3位決定戦後、相手主将から「この舞台で日本代表と戦えて誇りに思う」と言われました。オリンピックでメダルを獲得できた喜び、安堵を抑え、相手チームへの敬意を示した姿は、勝ち負けを超え、ラグビー選手としての品位を感じ、敗者である私も胸を張ることができました。引退後も、人と接する姿勢の原点になっています。

情熱 ながとブルーエンジェルス | **平野 優芽**

私はパリオリンピックのアジア予選で情熱からくる力を実感しました。涙を流しながら国歌を歌うチームメイト、観客席で一緒に戦ってくれる仲間たち、そしてスタンドからのたくさんの声援。あの時の気持ちの高ぶりや会場の一体感が自分たちの力だけではない、それ以上のパワーに後押しされながらプレーできるのは選手として幸せな時間でした。

結束 ナナイロプリズム福岡 選手兼GM | **中村 知春**

ラグビーは個の力では勝てない競技です。15分の1という役割を担う歯車として機能することが求められます。組織の中で自己の居場所を築き、自分より優れた者を認めて頼ること、そして信頼を軸に己の仕事を全うすること。その過程が人を成長させ、生涯続く仲間との強固な絆を生みます。結束の価値観こそ、我々がラグビーに魅了される理由かもしれません。

結束 東芝ブレイブルーパス東京 アンバサダー | **大野 均**

ラグビーで培われる結束は、「誰かのために己の最善を尽くし続けること」で、スポーツの枠を超えて人生を豊かにするものだと思います。2015年の南アフリカ撃破は、このRWCで良い結果を残さなければ、次の自国開催のRWCの成功は成しえないという思いが背景にありました。代表全員がその思いを胸に刻みながら自分たちの最善を尽くし、勝ち取ったものでした。

INDEX

私とコアバリュー …… 2
INDEX …… 3
会長メッセージ …… 4

1章 JRFUの現在地 …… 5

数字で見る 日本ラグビー …… 6
JRFU100年の軌跡 …… 7
表彰受賞者 …… 8

特集｜座談会 …… 9
「ラグビーが世界一身近にある“まち”」の実現に向けて
JRLO 専務理事　東海林 一
JRFU 業務推進部門　村上 聡
JRFU 業務推進部門　西峯 大祐
JRFU 最高事業統括責任者　山神 孝志

2章 活動報告 …… 13

CEOメッセージ …… 14
Year in Review 2025 …… 15
中期戦略計画2025-2028
初年度報告 …… 16
強化 …… 18
エンゲージメント …… 21
普及育成 …… 24
女子ラグビー …… 27
組織基盤 …… 29
財務基盤 …… 31
環境サステナビリティ推進活動 …… 33
JRFU基金
スクラム・ジャパン・プログラム …… 34
ラグビー重症外傷への
最先端医療推進支援基金 …… 35
支部報告 …… 36

3章 ガバナンス …… 37

コーポレートガバナンス …… 38
ガバナンスコードへの対応 …… 39
コンプライアンス・インテグリティ …… 40
スポンサー …… 41

団体名の表記について　本レポートでは、日本ラグビーフットボール協会を「JRFU」と略記する。
本レポートの報告対象期間　2025年4月1日～2026年3月31日　※ ジャパンラグビーリーグワンは2025-2026シーズンを対象とする。

「ANNUAL REPORT2025」を
お読みになったご感想をお聞かせ下さい
感想はこちらから

会長メッセージ

ジャパンラグビーを支えて下さった皆さまへの感謝と共に、ラグビーが社会に提供する新たな価値とビジョンを発信します。

公益財団法人
日本ラグビーフットボール協会
会長
土田 雅人

平素より、ジャパンラグビーへの多大なるご支援並びに熱いご声援を賜り、心より感謝申し上げます。協賛各社の皆さま、試合会場に足を運んで頂いた皆さま、ジャパンラグビーに関わる全てのステークホルダーの皆さまに重ねて御礼を申し上げます。このたび、アニュアルレポート2025年度版が完成致しましたので、ご報告申し上げます。

中期戦略計画2025-2028 初年度振り返り

私どもは、昨年3月22日に公表したJAPAN RUGBY中期戦略計画2025-2028の中で、成長サイクルとして、これまで進めてきた「基盤強化」を一層盤石なものにすると共に、「競技力の強化」と「収益力の強化」を推し進め、そこで得られた資産を「関係人口の拡大」に投資していくことを掲げました。この成長サイクルを推進するため、事業全体を7つのPillar（強化、エンゲージメント、普及育成、女子ラグビー、組織基盤、財務基盤、価値基盤）に分解し、それぞれについて、遂行責任者と推進組織、達成目標を定めて、目標の達成に向けて取り組みを進めてまいりました。

代表チームの活動としては、昨年7月、15人制男子日本代表が12年振りにウェールズ代表に勝利し、世界ランキングを12位へ上げた他、15人制女子日本代表はRWC2025イングランド大会に出場、女子セブンズ日本代表はHSBC SVNS2026ドバイ大会において、過去最高の3位となるなど、着実な成長を遂げられた1年であったと考えております。

今回の中期戦略計画では、代表活動だけでなく、協会事業全般についても成長サイクルに紐づく重要目標達成指標（KGI）や、それぞれのPillarごとの重要業績評価指標（KPI）を設けており、今回のアニュアルレポートでは、中期戦略計画としての進捗状況をお示しするだけでなく、進捗が芳しくない領域は今後のリカバリー方針などについても分かりやすくまとめております。

RWC2035 大会招致に向けて正式立候補

昨年12月、私どもは、RWC2035大会の招致に正式立候補する旨の意向を国際統括団体であるワールドラグビーに伝えました。開催が実現すればアジア初開催となった2019年大会に続く2度目の開催となります。この2035年大会の開催地については、オーストラリアで開催される2027年大会までに決定されることとなっており、そういった観点からも、2026年度事業は極めて重要であると考えております。

100周年に向けて

弊協会は11月30日に創立100周年を迎えます。協会設立からこれまで、ジャパンラグビーの普及や強化などのため尽力された先人たちへ、改めて感謝すると共に、次の100年この先の未来に向けてもさらなる進化を遂げられるよう、思いも新たに、協会運営に取り組んでまいる所存です。中期戦略計画で定めた活動指針「ラグビーが世界一身近にある国へ」「世界のラグビーをリードし、社会変革の主体者となる」「再びワールドカップを日本に招致し、世界一になる」を実現すべく、ジャパンラグビーに関わる全ての方々と心を一つにして、歩みを進めて行きたいと考えております。今後ともご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

1章 JRFUの現在地

6 数字で見る 日本ラグビー
7 JRFU100年の軌跡
8 表彰受賞者
9 特集｜座談会
「ラグビーが世界一身近にある“まち”」の実現に向けて

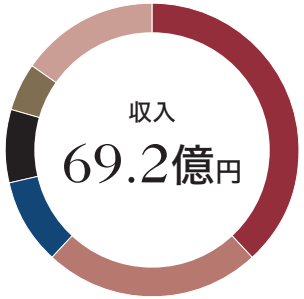
数字で見る 日本ラグビー

日本ラグビーの現在地を、さまざまな角度から「数字」でご紹介します。登録チーム数、選手数、主催試合来場者数、収益構造、世界ランキング、SNSフォロワー数など——
それぞれの数字が、国内外での日本ラグビーの存在感と未来への可能性を物語ります。

登録チーム数・選手数

登録チーム数	2,600
男子	83,853人
女子	5,155人

収益構造



協賛金収益	26.4億円	38.2%
入場料収益	16.5億円	23.8%
受取補助金	6.6億円	9.6%
放送権料	5.6億円	8.1%
業務受託料収益	3.6億円	5.2%
その他	10.5億円	15.1%

登録スタッフ数

コーチ	13,546人
レフリー	8,429人
セーフティアシスタント	13,145人

自治体ワンチーム 加盟自治体数

160自治体

主催試合来場者数

テストマッチ	2025年10月25日 日本代表 vs オーストラリア代表 国立競技場	41,612人
大学選手権	2026年1月11日 明治大学 vs 早稲田大学 MUFGスタジアム	43,489人
リーグワン2025-26 プレーオフ決勝戦	2026年6月7日 神戸S vs S東京ベイ MUFGスタジアム	50,451人

ワールドラグビー世界ランキング

男子12位

女子11位

公式SNSフォロワー数

X	27.3万人
Instagram	23.0万人
TikTok	1.1万人
Facebook	21.2万人
YouTube	10.8万人

JRFU100年の軌跡

ラグビーを愛する多くの方々に支えられ、今年で創立100周年の佳節を迎えます。
皆さまと共に、これまでのJRFU100年を回顧します。

1926

1926 日本ラグビー蹴球協会設立

関東協会、西部協会の創立を受けて、JRFUの前身である日本ラグビー蹴球協会が設立、1930年には初めて日本代表が結成されカナダに遠征しました。（6勝1分）

1965 初の日本代表強化合宿開催

自衛隊朝霞駐屯地で初めて強化合宿（社会人41名、学生13名）を実施、1968年のニュージーランド遠征では、オールブラックスジュニア戦で勝利しました。

1971 イングランド代表と大激戦

第1戦（花園）で19-27、第2戦（秩父宮）で3-6と、イングランド代表の屈強なFWに対し、低いタックルと展開で死闘を演じ、世界に衝撃を与えました。

1987 第1回RWC開催

第2回大会でジンバブエ代表に勝利したものの、第1回から第7回大会までの戦績は1勝2分21敗でした。その後も日本代表は、第10回フランス大会まで連続出場しています。

2002 日本女子ラグビー連盟がJRFUに加盟

2003 トップリーグ発足

2013 公益財団法人へ移行

2016 サンウルブズとしてスーパーラグビーに参戦

2015 南アフリカ代表に勝利

RWC2015イングランド大会で劇的な逆転勝利（34-32）を収め、史上最大の番狂わせと言われました。この大会で日本代表は予選プールで3勝しながら決勝トーナメントへ進めませんでした。

2019 RWC2019初の日本開催

アイルランド代表、スコットランド代表に勝利し、4戦全勝で初めてベスト8入りを果たし決勝トーナメントに進出しました。多くのにわかファンを生むなど、日本中が熱狂しました。

2023 ハイパフォーマンスユニオン入り

100 Anniversary 1926 2026

2026 RWC2035大会の開催に向けて正式立候補を表明

RWC2019年以来2度目の日本招致を目指して、正式に立候補を表明しました。招致メッセージに「NO SIDE SPIRIT」を掲げて、オールジャパンで実現を目指します。

表彰受賞者

JRFUでは、永年にわたり各地でのラグビーの振興、発展に寄与、貢献した個人または団体に対し、敬意及び謝意を表するため、表彰制度を設けております。
2025年度は、支部協会からの推薦に基づき、6名の方々が「功労賞」を受賞されています。

2025年度受賞者

功労賞
関東協会 推薦
田尻 稲雄 氏

この度は功労賞を受けるに際し、一言御礼の言葉を申し上げます。
受賞の理由として長年にわたるクラブ組織化に対する関わりと普及活動に従事してきたことに対することとお聞きしました。誠にありがとうございます。

功労賞
関西協会 推薦
澤村 春雄 氏

この度は日本ラグビーフットボール協会から功労賞を拝受賜り心より感謝申し上げます。
兵庫県ラグビースクールはラグビーを愛する関係者皆さまのご支援で58年の歴史が礎かれています。関係者の皆さまにお礼申し上げ、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

功労賞
関西協会 推薦
村上 栄司 氏

この度は過分なる表彰を誠にありがとうございます。これまでプレーヤーズウェルフェアのため、医務や安全対策を微力ながら取り組んでまいりました。今後も現場主義の立場を堅持し、さらに精進してまいる所存です。

功労賞
関西協会 推薦
小野田 昭英 氏

高校で出会ったラグビーですが、私の生き方を決定づけたのは大学時代の二度にわたる左足骨折でした。その後教員となり、30代から県協会に関わり気づけば40年近くが経ちます。ボール（仲間）を生かすため、自己犠牲も厭わないラグビー。今後も発展に微力ながら尽力してまいります。すべてのご縁に深く感謝致します。本当にありがとうございます。

功労賞
九州協会 推薦
城戸 英敏 氏

この度は身に余る光栄な賞を賜り、心より感謝申し上げます。ラグビーを通じ多くの教え子や仲間に恵まれました。この賞は私一人のものではなく、支えて下さった皆さまや選手たちとともにいただいたものと感じています。今後も「For All」の精神を胸に、競技の発展と次世代育成に微力ながら尽力してまいります。本当にありがとうございました。

功労賞
九州協会 推薦
和田 利通 氏

この度は功労賞を賜り、誠にありがとうございます。宮崎県協会レフリー委員長就任後、各大会や全国会議で研鑽を重ね、国体では競技力向上だけでなく地元レフリー主体の運営に力を注いでまいりました。高校日本代表のイングランド遠征など海外遠征を重ね、若手レフリーも着実に育ち、大きな励みとなりました。これまで支えて下さった関係者の皆さま、家族に心より感謝申し上げます。

特集｜座談会

「ラグビーが世界一身近にある“まち”」の実現に向けて

ラグビーの普及と価値向上に向け、JRFU、リーグワン、自治体ワンチーム※が連携し、さまざまな取り組みを推進しています。

それぞれの立場で抱える課題を共有し、今後の可能性を探りました。

※「ラグビーとの地域協創を推進する自治体連携協議会」の通称

ジャパンラグビーリーグワン
専務理事
東海林 一

JRFU
業務推進部門
自治体ワンチーム事務局
村上 聡
（江戸川区より出向）

JRFU
業務推進部門
自治体ワンチーム事務局
西峯 大祐
（横浜市より出向）

JRFU
最高事業統括責任者
（CEO）
山神 孝志

再招致に向けて、自治体ワンチームと協働し、「NO SIDE SPIRIT」の精神を世界へ届けたい

── JRFUは、RWC2035の開催国に立候補しました。最初に、この意義についてお話し下さい。

山神　RWC2019日本大会は日本代表の活躍もあって大きな盛り上がりを見せ、その後国内リーグも“リーグワン”として大きく発展しました。この実績を踏まえ、もう一度ラグビーの良さを考える機会を持ちたいと考えたのです。

また、世界で分断が進むなか、戦後90年の節目の年に日本でワールドカップが開催できるという事実は、大きな意義があると考えています。この想いを込めて、「NO SIDE SPIRIT」という招致スローガンを策定しました。この言葉は「試合が終わればお互いを称え合う日本ラグビーに根づいた精神」であり、人と人が繋がるのは素晴らしいことだと、改めて感じることのできる機会になればと思っています。

東海林　RWC2019日本大会は日本が世界のラグビーを学ぶ機会でした。そして、世界から学んだことを活かして企業と地域とファンがひとつになり、2022年にリーグワンという新しい姿をつくり上げることができました。2035年は、日本ラグビーが世界から学んで大きく進化した姿を世界へ発信し、今度は日本が世界ラグビーの進化に貢献したいと考えています。

── 自治体ワンチームは、2035年の招致に向けて、どのような役割を果たしたいとお考えでしょうか。

村上　自治体ワンチームは、RWC2019の日本開催を契機に誕生した組織です。RWC2035の招致は自治体ワンチームにとっても悲願であり、実現に向けた基盤づくりに取り組んでいます。

西峯　具体例としては、加盟自治体によるパブリックビューイングの環境整備など、ラグビーを観る環境の創出に努めています。また、開催地選定を担うワールドラグビーは試合会場での環境サステナビリティ対応を求めており、JRFUも2025年に環境サステナビリティ取組方針を公表しました。自治体ワンチームもこの方針に賛同し、日本代表の試合会場では、開催自治体と連携し、持続可能な航空燃料であるSAFの原料になる廃食油の回収や、家庭で余った食品を回収して福祉施設などへ寄附して、食品ロス解消に貢献するフードドライブ活動を行う取り組みも始めています。

山神　自治体ワンチームには、このような取り組みへの協力をはじめ、ラグビーの魅力を地域に伝え、さらなる連携強化を図るための手厚いバックアップを受けていると感じています。今後はさらに、リーグワンの試合未開催地や7人制ラグビー大会を開催する自治体との協力体制を、より強化したいと考えています。

男子ラグビーワールドカップ2035日本招致メッセージ

「NO SIDE SPIRIT」

このメッセージは、戦いが終わればお互いを称え合う、日本ラグビーに根付いた精神を表す言葉です。分断や格差が深まる時代こそ、未来に向けて、この合言葉を日本ラグビーから発信する価値があると信じています。

ラグビーに触れる、楽しむシーンを増やしてさらなる普及を

──招致に向けてもラグビーのさらなる普及が欠かせないと思いますが、現状どのような課題があるとお考えでしょうか。

東海林　スポーツに限らず、自由時間の使い方が多様化していることから、ラグビーが選ばれるためには、接触機会をつくることが重要になると考えています。そこでリーグワンの各チームは、本拠地に定めているホストエリアの地域にある学校を訪問してラグビーを一緒に体験してもらい、面白さが実感できる機会づくりに取り組んでいます。また、病院訪問や文化活動への参加など、直接ラグビーと結び付かない場所にも足を運び、ラグビーとの接点づくりに努めています。

村上　江戸川区は、ホストエリアとしてクボタスピアーズと地域連携協定を結び、学校訪

問や区主催イベントへの参加、さらには試合への区民招待で普及に協力していただいており、とても感謝しています。

西峯　横浜市も、横浜キヤノンイーグルスのホストエリアであり、同様の普及活動に取り組んでいただいています。

――自治体ワンチームとしては、どのような課題をお持ちですか。

村上　実は私は江戸川区ラグビースクールの校長として、主に週末は普及の現場に携わっています。そこで感じるのは、やはり「危ない」のイメージが先行し、ラグビーの良さ、素晴らしさが浸透していないことです。しかし、体験会を実施すれば「楽しかった」という声は大変多く、実際に入会までつながるケースもあります。体験してもらえれば、ラグビーの素晴らしさは十分に伝わると自信を持っています。この経験から、ラグビーの素晴らしさをアピールする機会づくりが、課題克服に必要だと思っています。

山神　危険を伴うスポーツであることは事実ですが、暑熱対策や脳震盪対応などさまざまな観点から、安全確保に配慮していることも、しっかりアピールする必要がありますね。

西峯　ほかにも、より多くの子どもたちに触れてもらうために検討を進めているのが、マルチスポーツの視点です。ラグビー以外にもさまざまなスポーツが体験できるプログラムにすることで、これまでラグビーに興味がなかった方たちにも参加していただきやすくなります。自治体では特定の競技だけ応援するのは難しいので、こうしたプログラムを実施することで、ラグビーへのハードルが下がると「体験して楽しかったからスクールに行ってみよう」といった流れがつくれるのではないでしょうか。

山神　マルチスポーツの取り組みについては、日本スポーツ協会や他の競技団体とも検討を進めており、近々発表できると思います。日本ではひとつの道を突き詰め、極める文化が根づいていますが、海外では多くのスポーツに取り組むことを推奨している国もあります。さまざまなスポーツを経験し、それぞれの良さや特徴を理解したうえで、最も魅力を感じたスポーツに取り組む環境づくりも、我々の仕事だと考えています。

東海林　そういったイベントをきっかけに、より多くの人たちにラグビーが選ばれるようになるといいですね。

山神　もうひとつ、うまく活用したいのが、小中学校の学習指導要領にタグラグビーが記載されたことです。授業でタグラグビーの楽しさを体験した小中学生が、学校以外でもやってみたいと思った時にプレーできる環境づくりは、これから特に重要です。例えば、リーグワンの試合会場にタグラグビーが楽しめるエリアを設け、自分たちがプレーした後にプロフェッショナルの試合が観られる、といった環境づくりは、ひとつの案だと思います。

西峯　ほかに私が課題に感じているのは、リーグワンチームやグラウンドなどのスポーツ資源が十分ではないエリアでの取り組みです。具体策は検討中ですが、この先、各エリアの自治体と都道府県協会との連携はより一層重要になると思います。地域での持続可能な活動を支えていくためにも、自治体ワンチームがハブとなり、強固な基盤づくりを加速させていきたいと考えています。

ラグビーならではの価値を地域に最適な形で根づかせていく

――さらなる普及のためには、ラグビーの提供価値の訴求が重要になると思います。この点については、どのようにお考えでしょうか。

山神　ラグビーは、監督やコーチが試合中に

PICK UP!

クボタスピアーズ船橋・東京ベイ×江戸川区

ホストゲーム各試合へ区民25組50人を無料招待

江戸川区では地域連携の一環として、地元チームの試合を観戦できる機会を提供。区民がスタジアムへ足を運ぶきっかけづくりを進めています。

JRFU×横浜市

元ラグビー日本代表メンバーによる横浜市内小学校訪問

子どもたちに、ラグビーの楽しさを伝えようと、元日本代表選手が横浜市内の小学校を訪問しました。体育館は、「大きいなぁ」「すっげー」子供たちの歓声と笑顔で一杯になりました。

介入できないスポーツです。そのため、刻々と変化する試合状況を一人ひとりのプレーヤーが見極めて瞬時に判断し、チーム全員が連動して最適なプレーを選択し、実行することが必要です。ラグビーは、このようにチームワークや瞬時の判断能力を高めることができる観点でも、価値あるスポーツだと思います。

東海林　ほかのスポーツには見られないという点では、「企業×地域×自治体の三位一体モデル」もラグビーならではの価値と言えるでしょう。その一例が、福岡県うきは市に誕生したクラブチーム「ルリーロ福岡」です。ルリーロ福岡は、所属する約70名の選手がプロとしてラグビーに携われる環境はありません。しかも、うきは市は人口2.6万人の地方都市のため、仕事探しの懸念がありました。ところがフタを開けてみると、地元は選手たちを大歓迎してくれて、全員が各地元企業への就職が決まりました。ラグビーチームが生まれたことで、企業の雇用に好影響を及ぼしたのです。こうしたチームと地元企業の関係性に自治体も注目し、主催イベントにルリーロ福岡の選手の参加を依頼しているほか、ラグビー体験会やプレーの面白さを紹介するトークショーなども積極的に開催しています。その結果、ルリーロ福岡は300社以上の協賛企業を持ち、エリア11自治体と連携協定を結び、完全地域密着型モデルを構築して、地域活性化に大きく貢献しています。

西峯　理想的な地域共創の実例ですよね。

東海林　このようにリーグワンの各チームは、地域に根ざした「企業×地域×自治体の三位一体モデル」の構築に注力しています。

村上　江戸川区は、大手企業が施設を構える地域ではなく、中核を担っているのは70万の住民です。我々が地域住民に提供するサービスは0歳から100歳までの全世代を対象としており、スポーツはその実現に大きく貢献できるものです。なかでもラグビーは、教育的価値や女性活躍の促進、住民への勇気づけなどの観点で、幅広い役割を担うことが可能です。江戸川区では、こうした考えのもと、クボタスピアーズと連携し、試合応援など住民が一体となって楽しめる機会づくりを進めています。

東海林　昔は強かった学校や町内会などのつながりも、最近は希薄になる傾向が見受けられます。この状況を考えると、スタジアムに足を運んでみんなで地域のチームを応援し、楽しむことで、とても強い絆が生まれるのではないかと思いますね。

それぞれの視点から見る「ラグビーが世界一身近にある“まち”へ」

――自治体ワンチームでは「ラグビーが世界一身近にある“まち”へ」という理念を掲げています。実現した時、どのような姿を思い描かれますか。

西峯　街中の公園や学校で、子どもたちがサッカーボールを蹴ったり、キャッチボールをしたりしているように、ラグビーボールで楽しむ風景が当たり前になっているといいですね。また、パブリックビューイングが定着し、スタジアムがない地域でも、みんなで一緒にラグビーを観て、応援して、盛り上がる姿を目にしたいと思います。

村上　例えば、健康増進の行政施策にラグビーの動きを取り入れるなど、さまざまな世代を対象とした各種の施策で“ラグビー”というワードを目にする状況にしたいと思います。そのためには、“ラグビー”の文字から「楽しい」「面白い」というイメージが感じられるようにすることが必要です。そのポテンシャルは、十分にあると確信しています。

東海林　ラグビーをやった人、みた人、ささえた人が、「今日はとてもいい日だった」と、思ってもらえるといいですよね。ラグビーを通じてチームワークを知ったり、誰かと一緒にチームや選手を応援したりすることで、「人を応援すると自分まで気持ちが良くなった」「戦うというのは、相手を打ち負かすことではなく、自らを高めることなんだ」と、人と人がつながる素晴らしさや自己成長を感じてもらえたら嬉しいですね。

山神　ルリーロ福岡のような完全地域密着型モデルを、全国各地の7人制チームでも構築したいと考えています。リーグワンの選手が参加する流れをつくり、地域の人々や企業、自治体の注目度が高まることで、7人制の強化や有望選手の発掘などが進むことを期待しています。ラグビーは、ボール1個で楽しめるスポーツです。公園などに多様な人たちが集まり、ラグビーボールを手に交流する景色が日常化するよう、一緒に頑張っていきましょう。

2章 活動報告

14 CEOメッセージ
15 Year in Review 2025
16 中期戦略計画2025-2028　初年度報告
18 強化
21 エンゲージメント
24 普及育成
27 女子ラグビー
29 組織基盤
31 財務基盤
Close Up ！
33 環境サステナビリティ推進活動
34 JRFU基金 スクラム・ジャパン・プログラム
35 ラグビー重症外傷への最先端医療推進支援基金
36 支部報告

CEOメッセージ

新中期初年度、満足のいく結果ではありませんでしたが、反省と改善を繰り返して、次世代に向けた歩みを進めます。

公益財団法人
日本ラグビーフットボール協会
最高事業統括責任者（CEO）
山神　孝志

日頃より、弊協会事業へ多大なるご協力を賜り、心より御礼申し上げます。全国のラグビーフットボール協会の皆さま、自治体の皆さまには、国際試合や社会人・大学生・高校生などの大会運営や普及事業などを支えて頂き、本当にありがとうございました。また、全国約2600ものラグビーチームの指導・運営にあたられている先生方、監督やコーチ・レフリー・スタッフの皆さま、選手の活動を支えて頂いているご家族の皆さまにも重ねて感謝申し上げます。この章では、主に2025年度の協会事業についてご報告申し上げます。

2025年度実績の成果・実績

2025年度は、昨年3月22日に公表したJAPAN RUGBY中期戦略計画2025-2028の初年度として、次なる高みを目指して新たなスタートを切った1年となりました。7つのPillarごとに年間の活動を総括します。

「強化」　強化は、特に15人制男子、女子セブンズでは着実な前進があったと考えております。レフリーやコーチの育成も、計画に沿って進めております。

「エンゲージメント」　収入の柱となる入場料、放映権料、協賛金、いずれも営業面での強化を図る必要性を認識しており、既に対策に着手しております。

「普及育成」　プレーヤー、登録者、体験者を増やすため、登録制度の見直しを含む、普及育成に関わる推進体制の強化に取り組みました。

「女子ラグビー」　コミュニティの構築や認知度の向上に向けて、リーグワンや三支部協会、都道府県協会とも連携して、事業を推進しました。

「組織基盤」　初めてエンゲージメント指標の調査を実施、協会組織の強みと弱みを把握しました。基盤強化のため、適切な対策を講じてまいります。

「財務基盤」　予算管理とその監視機能も十分に機能しておりませんでした。2026年度に入り、既に具体的な対策に着手しております。

「価値基盤」　協会スタッフのみならず、ラグビーに関わる全ての人々が、ラグビーの価値を考え、高め、守り、伝えられるよう、協会全体の取り組みをスタートしました。

また、JAPAN BASE（福岡）では、将来を見据えた事業戦略を再構築し、相撲部屋やサッカーチームの受け入れ、第2グラウンドの人工芝化を実行しました。その他、協会全体としてのガバナンス強化や情報発信に関わる取り組みも進めてまいりました。

決算概況

2025年度は、新しい中期戦略計画の初年度となりましたが、最終的な当期一般正味財産増減額は－855百万円となりました。さまざまなチャレンジがあった1年、この間も追加的な収支改善策を講じてきたところでしたが、大変遺憾な結果となりました。改めて申し上げるまでもありませんが、協会事業を安定的かつ持続的に遂行していくためにも、要因分析を適切に行った上で、予実管理の手法の見直し、決裁や調達に関わるルールの整備、職員の意識改革に繋がる研修などにも取り組む所存です。

いかなる事業場面においても、常にコアバリュー（品位、情熱、結束、規律、尊重）を大切にしながら、さまざまな課題と向き合い、確実な前進、成長を目指していく所存です。引き続き、ご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

Year in Review 2025

2025.7.9

JAPAN RUGBY CROWDFUNDING 開始

スクール運営、地域大会の開催支援など、資金確保への課題に対応するため、ラグビー領域に特化したクラウドファンディングを立ち上げました。

2025.8.22

女子RWC2025イングランド大会出場

３大会連続６回目の出場、スペイン代表には勝利したものの、アイルランド代表、ニュージーランド代表に敗れ、予選敗退となりました。

2025.11.28

GREEN×EXPO 2027・JRFU・JRLO 包括連携協定締結

JRLOと共に、持続可能な社会と自然環境の実現に関する施策にラグビー界一体となって取り組み、環境サステナビリティを推進します。

2025.10.19

ラグビーでつながる国際交流フェスタ2025 in 豊田市 開催

多文化共生社会の実現のため、地域住民と外国人コミュニティの交流機会を創出することを目指して豊田市にて初めて開催されました。

2026.1.14

RWC2035正式立候補を申請

ラグビー界だけでなく、スポーツ界にとって、世界にとって最高の大会として実現したいと、開催国としての立候補を正式に申請しました。

2026.3.13

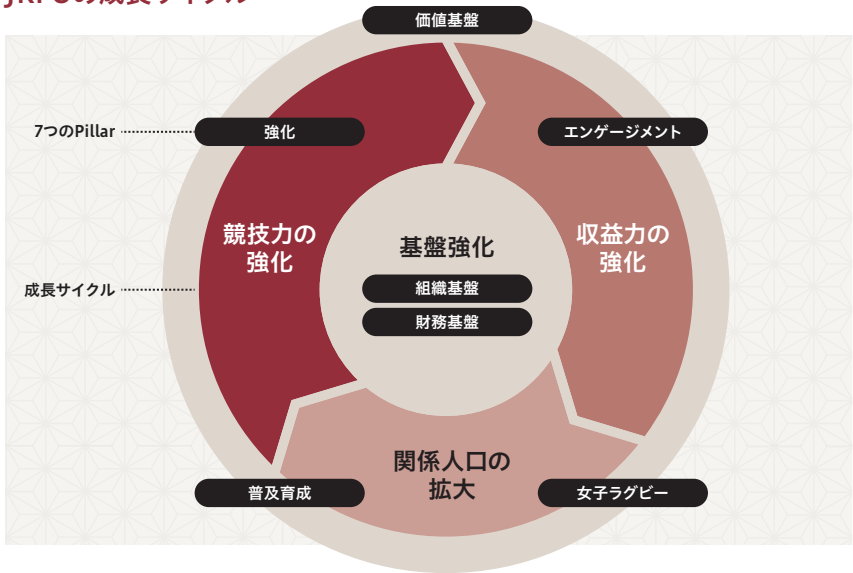
JAPAN BASE第2グラウンド人工芝改修工事完了

スポーツ、レクリエーションを楽しむ環境づくりをコンセプトに、賑わいの創出から地域経済の活性化に寄与できる施設を目指します。

中期戦略計画2025-2028　初年度報告

2025年3月に公表しました中期戦略計画2025-2028では、ワールドカップの近い将来での日本招致を目指して、「海外戦略」「地域連携」「ラグビーファミリーの拡充」に注力することとし、また、これらに関わる事業を推進するため、「競技力の強化」「収益力の強化」「関係人口の拡大」「基盤強化」という4つの成長サイクルを設定しました。さらにこれを、強化、エンゲージメント、普及育成、女子ラグビー、組織基盤、財務基盤という6つのPillarに分解し、これら全体を価値基盤がカバーする構造とし、それぞれについて、遂行責任者と推進組織、達成目標を定めた上で、各種事業に取り組みました。2026年度はJRFU100周年の節目でもある点も踏まえ、次の100年に向けて、ラグビーが世界一身近にある国の実現を目指して、関係者の皆さまと心を一つにして、歩みを進めてまいります。

JRFUの成長サイクル



競技力の強化
ハイパフォーマンスユニオンとして、強豪国とのテストマッチでも対等な勝負が挑める強い日本代表を作ります。また、現在の日本代表はもちろん、将来の代表選手を育てる、世代横断的な取り組みも重要です。主に強化Pillarで事業を推進します。

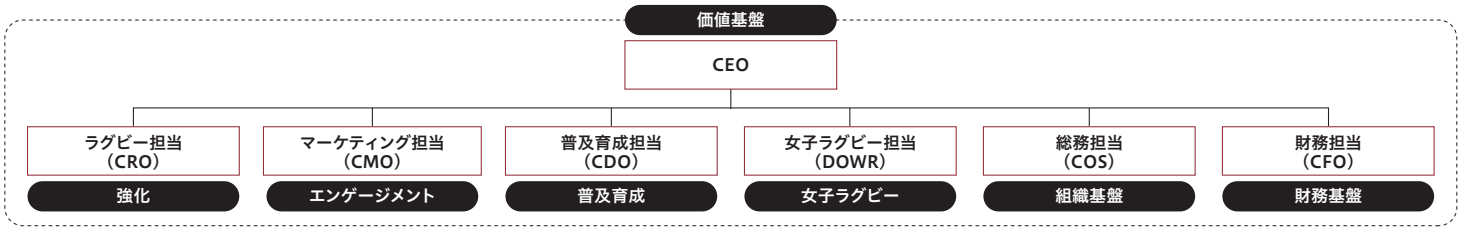
収益力の強化
強い日本代表のコンテンツリソースを最大限活用し、ファンを増加させると共に、協賛や放映権、チケット売り上げ、グッズ販売などの販路の拡大や会員組織の拡充を図ることで収益化を進めます。主にエンゲージメントPillarで事業を推進します。

関係人口の拡大
競技力と収益力の強化によって生み出された収益を、ラグビーをする人、ささえる人など、ラグビー関係者へ投資します。ラグビーをいつでもどこでも、長く楽しめるような環境を整備します。主に普及育成および女子ラグビーPillarで事業を推進します。

基盤強化
成長サイクルの中心に位置する組織基盤と財務基盤は、競技力の強化が収益力の強化に連鎖し、さらに関係人口の拡大に繋がるという、成長サイクルの循環そのものを支えます。成長サイクルが好循環することにより、日本ラグビーの価値向上が実現される、そのため価値基盤Pillarは成長サイクル全体をカバーします。

事業遂行体制とPillar

中期戦略計画で定義した成長サイクルを起動させるため、また、事業遂行に関わる領域と責任体制を明確にするため、JRFUでは、最高事業統括責任者（CEO）をトップとする事業遂行体制を定めています。事業遂行責任者（CxO）はそれぞれのPillarの推進責任者となって、当該Pillarに関わる事業を推進しています。



中期戦略計画2025-2028　初年度報告

成長サイクル	中期戦略計画2025-2028における重要目標達成指標（KGI）			2025年度末時点での実績（経過）と進捗・サマリ	
	項目	2028年度末目標	実績（経過）	進捗*	サマリ
競技力の強化	RWC2025	ベスト8	予選敗退	△	予選グループにおいて1勝2敗の3位となり、予選敗退となった
	RWC2027	ベスト8定着	—	○	世界ランキングの上位国に勝利し、世界ランキングは12位にアップした
	2028ロス五輪	男女メダル獲得	—	○	男子はチャレンジャーシリーズでトップ8に入るも最上位大会への昇格ならず、女子はドバイシリーズにて過去最高の3位となった
収益力の強化	総収入	100億円 （CMO管轄で70億円）	69億2,400万円	△	協賛及びチケット販売が予算を下回り、総収入は2024年度を下回った
	JAPAN RUGBY ID	50万人	40万人	○	各種のエンゲージメント施策が奏功し、順調に増加している
関係人口の拡大	プレーヤー （うち女子）	100,000人 （うち女子8,500人）	89,008人 （うち女子5,155人）	○	小学生は減少するも、中高生は微増。新規登録者の拡大に加え、離脱しないパスウェイ構築をサポートした
	登録者 （レフリー、コーチ、セーフティアシスタントの合計）	20,000人	15,380人	○	セーフティアシスタントについて、5,142人の新規登録（資格付与）があった
	体験者	120万人	—	—	（小学校授業におけるタグラグビー実施者のカウント方法について調整中）
基盤強化	エンゲージメント指標　JRFU	3.50	3.32	—	2025年度に初めて調査を実施し、2028年度末目標を設定した
	エンゲージメント指標　都道府県協会	3.50	3.29	—	2025年度に初めて調査を実施し、2028年度末目標を設定した
	一般正味財産	20億円	-1.4億円	△	2025年度決算において、8.5億円の赤字となった

＊◎計画以上、○ほぼ計画通り、△計画未達

中期戦略計画2025-2028

成長サイクル 競技力の強化

関係するPillar

強化

強豪国に負けない持続的な強化基盤の確立を目指す

事業遂行責任者
ラグビー担当（CRO）
山神 孝志

MISSION

1 日本代表15人制・セブンズの競技力を向上させ、国際大会（RWC・オリンピック）での活躍をステークホルダーの共感に繋げ、永続するスポーツとして更に成長を目指す

2 競技力向上の環境基盤として、世界水準のレフリー・コーチ輩出、プレーヤーウェルフェア整備を進める

中期戦略計画2025-2028 初年度の総括

代表強化の基盤を固めて勝利にこだわる

15人制男子テストマッチは11試合5勝6敗。ランキング格上のオーストラリアとの善戦をはじめ、ランキングが近いウェールズやジョージアへの勝利もあり、世界ランキングを12位に上げました。男子セブンズはプレーオフ出場権を目指しましたが惜しくも敗戦に終わりました。

15人制女子においてRWCは悔しい結果でしたが、ドバイで開催された7人制HSBC SVNSでは史上最高位である3位の快挙を成し遂げました。

今後は各カテゴリー国際大会での勝利にこだわりながら、選手を支えるコーチ、レフリーの基盤強化にも取り組み、持続可能な日本代表ラグビーの仕組みづくりを推進します。

重要業績評価指標（KPI）		2028年度末目標	2025年度実績	進捗	サマリ
15人制男子	世界ランキング	10位	**12位**	◎	**RWC2027オーストラリア大会抽選においてバンド2に入る。**
	代表平均キャップ	600	**417**	○	**アイルランド代表戦（11月8日）。**
15人制女子	世界ランキング	8位	**11位**	△	**RWC2025イングランド大会初勝利なるも予選プール敗退。**
7人制男子	セブンズシリーズ	定着	**予選敗退**	△	**チャレンジャーシリーズトップ8に入るも最上位大会への昇格ならず。**
7人制女子	セブンズシリーズ	トップ8定着	**3位**	◎	**昨年最高位4位を更新して3位達成。**
レフリー	RWCレフリー	1名	—	○	**RWCに向けて、積極的に海外経験を促進し、U20チャンピオンシップ準決勝担当や女子ワールドセブンズシリーズのレフリーを輩出した。**
	オリンピックレフリー	1名		○	
	フルタイムレフリーの育成	10名		◎	**2名と新規契約を締結した。**
コーチ	HPコーチの発掘と育成	定性目標	—	△	**スキル担当コーチ1名を輩出した。**
安全対策	重症事故	0件	**16件**	△	**前年度に対して1件の減少。**

中期戦略計画2025-2028

関係するPillar

強化

活動報告①

次世代の日本代表を育む「JTSプログラム」の展開と世界基準への挑戦

日本代表の次世代層を対象とした「JTS（JAPAN TALENT SQUAD）プログラム」では、中期戦略計画における「RWC2027ベスト8定着」及び「世界ランキング10位」というKPI達成に向けた強化を加速させました。

本プログラムの核心は、国内の大学・リーグワンのステークホルダーとの強固な連携にあります。特にリーグワン各チームとの協力による実践機会の創出は、本プログラムの根幹を支える重要な要素となりました。

遠征前には三菱重工相模原ダイナボアーズやトヨタヴェルブリッツ、豊田自動織機シャトルズ愛知、リコーブラックラムズ東京といった国内トップチームの全面的な協力を得て、リーグワン開催期間中という非常にタイトなスケジュールにもかかわらず、高強度の練習試合を実施しました。

プロレベルのインテンシティを直接肌で感じることで、若手選手たちは自身のフィジカルや判断スピードにおける「世界との距離」を冷徹に把握し、個々の具体的な課題を明確化することができました。

また、大学側との連携においては、単なる選手派遣に留まらず、メディカルコンディショニング情報のリアルタイムな相互共有を徹底しました。

負傷発生時に代表ドクターから大学側ドクターへ詳細な診断データやMRI画像を即座に提供し、復帰プランを共同で策定するなど、選手のキャリアを最優先に考えた透明性の高い協力体制を構築しています。

さらに、これらの実践映像やパフォーマンスデータは、リーグワン各チームの代表者や採用担当者、リクルーターへも定期的に共有しました。

これにより、選手が「世界基準」の壁に直面した際の適応力や、ハイパフォーマンス環境下でのオフフィールドの準備姿勢を可視化し、将来の日本代表の基盤となるタレント発掘を多角的に支援しています。

オーストラリア遠征では、U20フィジー代表やU20オーストラリア代表との対戦を通じ、オン・オフ両面での準備を徹底させました。

各大学から届いた応援メッセージ動画は、過酷な遠征における選手の精神的支柱となり、所属チームとの絆を再確認する貴重な機会となりました。

今後もステークホルダーの皆さまの共感を得ながら、育成世代が国際舞台で「勇敢に戦い抜く」ための環境整備に尽力してまいります。

Voice

ステークホルダーとの強固な連携による「世界基準」の体現

15人制男子日本代表
チームディレクター
永友 洋司

オーストラリア遠征での3勝1敗という成果は、リーグワン、大学関係者の皆さまの多大なるご協力があってこそと深く感謝致します。今後もステークホルダーの皆さまと一丸となり、次世代層が世界で勝利する環境を整えてまいります。

中期戦略計画2025-2028

関係するPillar

強化

活動報告②

レフリーアカデミー発掘プロジェクト

このプロジェクトは、将来の国際大会で活躍するマッチオフィシャルの輩出を見据え、国際レフリー候補となる若手人材の早期発掘・育成を目的に実施しました。

一次選考は書類審査、二次選考（1月・JAPAN BASE）では、フィットネスや英語などのセッションに加え、実戦を想定したレフリングセッションとして、S&Cコーチ、レフリーコーチ、および現役のトップレフリーが参加して、パフォーマンスに直結する専門的スキルやマインドセットについて、指導とフィードバックを行いました。その結果、参加者のモチベーションは大きく高まり、レフリングに関する理解・知識の深化およびパフォーマンス向上に加えて、参加者が現時点で直面している課題の把握にもつながりました。

続く三次選考では、フィットネステストに加え、実際の試合におけるレフリング機会を提供し、パフォーマンスを精緻に評価しました。

これら一連の取り組みから、翌年度のアカデミーレフリーを選考しました。参加者にとっては、今後トップレフリーになるために必要な課題を認識することで、今後のレフリー活動へ生かされると考えています。

このプロジェクトは、今後も継続的に実施することで、計画的なレフリー育成と戦略的な国際レフリー人材の輩出につなげていきます。

Voice

若手レフリーの積極的な「発掘育成」でレフリーのレベル向上へ

ハイパフォーマンス部門
レフリーマネージャー
久保 修平

レフリングのスキルやマインドセットはもちろん、早い段階でレフリーの基礎であるフィジカルを高いレベルまで引き上げ、国際レフリーとして必要な英語のスキル向上を図り、ピッチ内外でのプレゼンスを高め、国内トップ、また世界で活躍するレフリーの育成を加速してまいります。

活動報告③

暑熱環境下における安全対策の強化

近年の気温上昇に伴い、スポーツ現場における暑熱対策の重要性が高まっています。これを受け、JRFUでは2025年度に「暑熱対策ワーキンググループ（WG）」を設置し、実効性のある対策の検討を行いました。選手の安全確保に加え、指導者や大会運営者が適切な判断を行うための共通基盤の整備を目的としています。

本WGではWBGTなどの環境指標に基づく活動判断基準や、クーリング・水分補給・休憩設計などの基本方針を整理するとともに、現場での意思決定を支援する運用面の設計を進めました。特に、代表活動やリーグワンなどエリートラグビーだけでなく、クラブチームや大学生、あるいは育成段階の高校生や中学生、ラグビースクールなども含めると、選手の基礎体力はもちろんのこと、練習環境や指導体制も大きく異なります。そのため、誰が・どのタイミングで・どのように判断するかを明確にすることで、それぞれのラグビー現場において、何よりも安全を第一に迷いなく対応できる体制づくりを目指しました。

本WGで検討された成果については、2026年度より各地における大会運営や強化活動において順次運用を開始し、その後も運用状況を踏まえた継続的な改善を行い、より実効性の高い仕組みへと発展させていきます。

Voice

「安全対策」が強化を支える

テクニカルサービス部門
中陳 慎一郎

「安全対策」は強化の土台であり、競技力を高める力になります。科学的根拠に基づく判断基準を示し、現場が自信を持って意思決定できる環境を整えることで、より高いパフォーマンス発揮を支援していきます。

2026年度運営方針

育成年代から代表へパスウェイ：高校、大学、リーグワンとの連携を強化し、早い段階から、日本代表チームの考え方を浸透させて国際試合経験を積む環境整備
科学的手法の活用：フルタイムのアナリストを配置し、情報収集・分析を行うと共に日本全国のラグビー関係者へ情報展開を行う仕組み整備
レフリー育成・強化：フルタイムレフリーを配置し、世界で活躍するレフリー育成と次世代レフリー発掘のために三支部協会・都道府県協会と連携
コーチ：全代表カテゴリーでの合同MTGを実施し共通課題であるパスウェイの再整備、選手評価基準等のレビューを実施

中期戦略計画2025-2028

成長サイクル 収益力の強化

関係するPillar

エンゲージメント

勝敗に左右されない
安定した収益基盤の構築へ

事業遂行責任者
マーケティング担当（CMO）
牧 健

MISSION

1 さまざまなファンとのタッチポイントを増やし、ラグビー全体のファンを増やすこと

2 ラグビーコンテンツ力をより多様化させ、持続可能なスポーツであるために必要な資金を獲得すること

中期戦略計画2025-2028 初年度の総括

外部環境変化に伴い、新しい収益モデルを検討

中期戦略計画の初年度としてさまざまなチャレンジを実施した結果、成果と課題が見えた1年でした。代表戦や大学選手権でホスピタリティプログラムを販売し、多くの試合で完売するなどご好評いただきました。またSNS投稿を増加し、視聴数・視聴時間を大きく拡大させました。一方で、昨今の物価高騰の影響により、試合興行の収支構造が課題となっています。

特に注目しているのは、大学選手権や女子日本代表戦の集客面において想定以上の成長が実現できたことです。RWC2027オーストラリア大会に向けた機運を活用し、既存パートナー様の権益メニュー拡充に加え、男子日本代表以外の訴求価値を提案し、日本ラグビー全体として安定した収益基盤を構築していきます。

重要業績評価指標（KPI）		2028年度末目標	2025年度実績	進捗	サマリ
入場料		20億円	**14億円**	△	**ホスピタリティプログラムの売れ行きは好調であるものの、入場者数が思うように伸びず、また人件費・宿泊費・マッチフィーの高騰で利益が確保できず。次年度は、女子、大学選手権の集客は伸びているため、連携した施策を進める。**
放映権料		10億円	**5.5億円**	△	**試合数が増加したことで売り上げは増加。代表戦のニュース露出メディアを拡大。次年度は、試合以外のコンテンツ提案、試合のパッケージ見直しにより、さらなる収入拡大を目指す。**
協賛金		30億円	**26億円**	△	**新たなパートナー確保を狙ったが実現できず。次年度は、提供する権益メニューの拡充、男子日本代表以外のパートナー枠の権益設計を行い、拡充を狙う。**
SAKURA CLUB	会員数	50,000人	**24,000人**	△	**ベンダーとの協業を重ね、上位ランク会員の特典を強化するなどした結果、会員と収益の拡大が実現された。**
	会員売上	5億円	**1.5億円**	△	

中期戦略計画2025-2028

関係するPillar

エンゲージメント

活動報告①

都道府県協会や自治体と連携し、地元の皆さんと共に代表戦を盛り上げ

2025年7月5日に、ミクニワールドスタジアム北九州で行われた日本代表対ウェールズ代表戦では、福岡県協会、北九州市協会、北九州市とも連携し、JR小倉駅構内の大型垂れ幕や階段広告での告知、駅周辺でのウェールズ代表に関連するイベントを定期的に開催しました。これは、RWC2019日本大会において、北九州市がウェールズ代表のキャンプ地となったレガシーを活かし、事前の盛り上げから、当日の国歌斉唱などの演出まで、地元の皆さんが携わることで、大盛況の代表戦とすることに成功しました。チケットは完売、会場も満席（13,487人）となり、素晴らしい雰囲気の中で、日本代表も貴重な勝利を収めることができました。

北九州市との連携はこれで終わらず、ミクニワールドスタジアム北九州では、男子代表戦の2週間後の7月19日、翌月にRWC2025イングランド大会を控えた女子日本代表がスペイン代表と対戦し2,400人の観衆の前、見事な勝利を収めました。

さらに、7月20日～21日には、太陽生命ウィメンズセブンズシリーズ2025第2戦北九州大会が開催され、全国から集まった12チームが熱い戦いを繰り広げました。

暑い夏をラグビーで盛り上げて下さった北九州の皆さまに感謝申し上げます。

Voice

地方協会や自治体と連携し、地元の人と共に代表戦を盛り上げ

大会運営部門　尾脇 明梨

私たちだけでは成しえなかったことも、地元の方々のお力をお借りすることで実現できました。会場をお借りするだけではなく、さまざまな連携を通して代表戦が開催されて良かったと思っていただけるよう、今後も関係づくりを深めていきたいと思います。

活動報告②

ファンクラブやホスピタリティの体験型の特典を拡大

2025年の日本代表戦において、日本代表のファンクラブ組織「SAKURA CLUB」の特典として、従来のチケット優先購入など、コンテンツだけでない、体験型の特典を追加し、会員数の拡大を図りました。

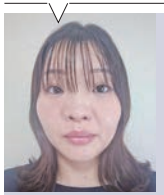
一つ目は、試合前日の練習（キャプテンズラン）の見学です。通常の練習とは明らかに雰囲気が違います。翌日のBIGゲームを前に、最後の調整を行う選手一人ひとりから、日の丸を背負うことの重みや誇り、緊張感がひしひしと伝わってきました。

二つ目は、試合当日の選手がスタジアムに到着した際のバス見学です。この後、わずか90分後には試合が始まります。バスから降りてロッカールームへ向かう通路を進む選手たち、じっと音楽を聴いている人、少し遠くを見つめている人、緊張をほぐすためか選手同士で談笑している場面もありました。

もちろん、試合に出場するのは、日本代表の選手たちですが、応援するファンの方々も気持ちを一つにして一緒に戦う、そんな思いを高めていただける機会となりました。

三つ目として、惜しくもメンバーには選ばれなかった代表選手たちや、公式マスコットであるレンジーとの記念撮影なども実施しました。選手たち一人ひとりに熱い声掛けをされるファンの姿が印象的でした。

Voice



試合会場における会員体験の最大化とコミュニティの拡大

ジャパンラグビーマーケティングファンクラブグループ
今関 公美

ノンメンバー選手との記念撮影など、SAKURA CLUB会員限定の魅力一杯の体験企画を実施、会員の皆さまの笑顔が印象的でした。これからも「自分も会員として参加したい」と感じていただけるような施策を推進していきたいと思います。

中期戦略計画2025-2028

関係するPillar

エンゲージメント

活動報告③

「ブライトンの奇跡」10周年記念試合を国内でも放送・配信

2015年9月19日RWC2015イングランド大会、ブライトンコミュニティースタジアムで行われたプールB初戦、日本代表は、南アフリカ代表から、後半42分、まさにラストワンプレーで逆転トライを決め、歴史的な勝利（34 - 32）を収めました。日本ラグビー史に残る、この試合は後に「ブライトンの奇跡」と呼ばれ、今も皆さまの脳裏に熱く焼き付いていることと思います。

あの感動から10年、2025年11月1日にイギリスのサッカーの聖地であるウェンブリー・スタジアムにて、日本代表対南アフリカ代表戦が開催されました。これまで、日本代表が出場するテストマッチであっても、海外で開催される場合には、権利的な兼ね合いもあり、日本国内での放送や配信は困難でした。しかし、この試合に際しては、プロモーターと事前交渉を重ねたことで、NHK、WOWOW、J SPORTSで放送・配信いただくことが可能となりました。残念ながら再び勝利を収めることはできませんでしたが、現地において制作や広報対応を行ったことで、コンテンツとしても、またJRFUのナレッジとしても貴重な興行となりました。

Voice

粘り強い交渉と現場の連携で実現した、10周年記念試合の熱狂

メディア事業部門
横田 杏那

「この一戦を最高の形で届けたい」一心で、現地側との交渉を重ねました。日本の放送局が南アフリカの代表選手へインタビューできたことや、放送席とピッチサイドでスムーズな協力体制を築けたことが、臨場感ある中継に繋がりました。

活動報告④

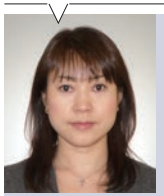
SNSでの動画コンテンツを拡充、アプリもリニューアル

2025年の日本代表戦から、若年層の視聴志向に合わせるべく、動画生成サービスを導入し、SNSなどで投稿するコンテンツに、ハイライトやショート動画を増やし、SNS全体のエンゲージメント拡大を図りました。

その結果、ラグビーファン以外の方々が見ても、一目でわかるスーパープレーなどの動画を投稿することによって、これまでリーチできなかった層に対しても、数多くの動画が届くようになり、ラグビーの魅力や圧倒的な迫力、とてつもない技術など、ラグビーの面白さや奥深さをお伝えすることができました。

また、12月のリーグワンの開幕に合わせて、リーグワンや日本代表のコンテンツが得られるアプリ「JAPAN RUGBY APP」を大幅リニューアルしました。単にインターフェイスが見やすくなっただけでなく、機能面でもチケット表示やファンクラブのステータスが分かるなど、コアファンにとってはもちろんのこと、ライトファンにとっても、このアプリを持つことで、ラグビーの楽しさが倍増するよう、「また見に行きたい」と思っていただけるよう、さまざまなサービスの改善を実現しました。

Voice



ファンの方に喜んで頂けるコンテンツ拡充を目指しています

ジャパンラグビーマーケティング
ファンコミュニケーショングループ
矢野 裕美

SNSやアプリを通して、ラグビー観戦をより一層楽しんだり、ラグビーの魅力を知って頂くきっかけとなるようなコンテンツの拡充を目指して活動しています。皆さんにより一層ラグビーを好きになって頂けたら嬉しいです。

2026年度運営方針

入場料：代表戦の全試合満席の絵作りからチケットの販売方針を設定し、チケットセールス・プロモーション案を策定・実施
放映権料：代表戦や大学選手権の放送・配信できるプラットフォームの拡大と公式映像を活用した二次使用の促進
協賛金：既存パートナー様への権益拡充と共に、大学・高校選手権に対する権益を整理し、協会全体で最低1社ずつ新規スポンサーの確保を実現
大会運営の体制整備：さまざまな大会運営の特性を把握し、会場運営コストの最適化。RWCを見据えた運営人材の育成

中期戦略計画2025-2028

成長サイクル 関係人口の拡大

関係するPillar

普及育成

支部協会、都道府県協会をはじめとする関係者との連携を通じラグビーを長く楽しめる環境づくりを目指す

事業遂行責任者
普及育成担当（CDO）
安井 直史

MISSION

1 誰もがいつでもどこでも、ラグビーを楽しめるように、ハードルを低くし、価値を拡げ、長く関われる環境をつくること

中期戦略計画2025-2028 初年度の総括

外部環境変化に応じた柔軟なラグビーへの接点づくり

少子化等の外部環境変化により、ラグビー登録者全人口は9万人を下回る結果となりましたが、中学生・高校生年代では微増しました。コーチの数は増えており、コーチの質の向上を目指した取り組みも行っています。また、規程の変更や、新たな大会の創出、ノンコンタクトであるT1 Rugbyの展開など、長くラグビーに関わるための接点づくりを行っています。

高校世代において、部員が少ないチームや部活動以外のクラブチームが参加でき、元日本代表選手による指導や試合ができる「Xエリアユースラグビー」を開催も、継続してラグビーをプレーしてもらうための取り組みになります。また、「みんなでラグビー（HP、SNS）」による情報発信の強化や、RDO（Regional Development Officers）を中心に、各地域の皆様とのコミュニケーションと連携を通して、引き続きラグビーの普及育成を推進します。

重要業績評価指標（KPI）		2028年度末目標	2025年度実績	進捗	サマリ
プレーヤー	登録プレーヤー数	90,000人	**89,008人**	○	小学生は減少したが、中高生は微増となった。
	SMBCカップ参加者数	12,000人	**7,334人**	△	小学生からの継続を考慮し中学生への拡大を検討。
	プレーヤー継続率	未設定	—	—	継続率と、地域大会の開催数は、新システム移行後に測定を実施するため、2026年度以降に目標値を設定する。
	地域大会の開催数	未設定	—	—	
	プレー環境の整備	定性目標	—	○	チーム規程の変更や新規大会の設立などを行った。
登録者	コーチ資格者数	13,000人	**13,546人**	○	安定的に講習会を開催した。
	レフリー資格者数	未設定	**8,429人**	—	中期期間中の目標は2026年度以降に設定する。
	セーフティアシスタント資格者数	14,000人	**13,145人**	○	SAは受講を無料化したことで、新規に5,142人が取得した。
	登録者の満足度	未設定	—	—	顧客満足度調査を行う。
	全世代パスウェイの整備	定性目標	—	○	ホームページその他、情報発信を強化した。

中期戦略計画2025-2028

関係するPillar

普及育成

重要業績評価指標（KPI）		2028年度末目標	2025年度実績	進捗	サマリ
体験者	ノンコンタクトラグビープログラム	定性目標	—	◎	**ワールドラグビーと連携し、T1 Rugbyの展開を実施。**
	体験会及びタグラグビー体験者	30、000人	—	△	**登録に関する見直しを行っている。**
	学校教育におけるラグビー体験者	1,100,000人	—	—	**2027年度に実施調査を行う予定。**
	SNSフォロワー数（X）	3,000人	**2,784人**	◎	
	JAPAN RUGBY TV視聴回数	350,000回	**330,000回**	○	
体制強化	普及予算	5億円 or 5％	**2.86億円**	△	**全体の4.1%に留まった。**
	スタッフ数	職員13人 専門官9人 RDO14人	**職員9人 専門官4人 RDO11人**	△	**RDOは専門スタッフ（分析など）2名を含む。**
	RDO配置数	11エリア＋3地域	**10エリア**	△	**エリア調整及び人材発掘に時間を要した。**
	三支部協会と都道府県協会の役員数	未設定	—	△	**規程の見直しを含む、関係整理が必要。**

活動報告①

X（クロス）- エリアユースラグビー

本事業は、部員数が少なく十分な練習や試合の機会を得られない高校世代の選手を主な対象に、元日本代表選手などの有資格コーチによる質の高いクリニック、交流試合、試合後のアフターマッチファンクションなどを通じ、試合機会の創出とプレーヤー間の交流を図り、とにかくラグビーの「楽しさ」を感じてもらう場を提供することを目的として開催しています。

2025年度は岩手県、熊本県、富山県の3会場で新規開催しました。福島県、和歌山県、香川県の3会場では前年度に引き続き継続開催され、開催地だけではなく近隣県の高校やクラブチームからも参加してもらいました。

クリニック、交流試合、ファンクションでは、各チームのプレーヤーが入り混じったグループやチームを編成し、コーチや開催地協会の工夫を凝らしたプログラムによりプレーヤー間の交流を深めることができました。

また、中学生にも参加してもらうことで、高校生でのプレーヤー継続の橋渡しの場としても活用いただいています。

Voice

ラグビーを「楽しむ」

普及育成部門　山口 輝

たくさんの友達や仲間を作り、いろんなプレーヤーとラグビーを通じた交流を図ってもらい、ラグビーの「楽しさ」をより感じてもらえる場を提供していきたいと思います。

中期戦略計画2025-2028

関係するPillar

普及育成

活動報告②

登録者領域のKGIとモニタリング環境の整備

JAPAN RUGBY中期戦略計画2025-2028で掲げる「関係人口の拡大」を推進するため、登録者領域のKGIをモニタリングする環境を整えました。

まず目標数値の整理と明確化を実施し、「登録者12万人」としていたKGIを細分化。その内訳を「プレーヤー10万人」、レフリー、コーチ、セーフティアシスタントの「有資格者ユニーク数2万人」と設定。この領域では「有資格者ユニーク数2万人」の達成を目指します。これにより、各担当で目指すゴールがより具体的になりました。

続いて、単に有資格者の「数」を増やすだけではなく、現場を支える皆さまの「質」の向上こそが安全・安心なプレー環境の基盤になると考え、指導力やスキルなどの「質」を定量的にモニタリングできる新たな環境を構築しました。今後はこのモニタリング体制を本格的に運用していく方針です。

2028年度までのKGI達成を確実に進めるとともに、有資格者の皆さまの継続的な「質」の向上を目指し、誰もが安全にラグビーを楽しめる環境づくりに邁進してまいります。

Voice

「質」を高めながら、「量」を増やす

普及育成部門
部門長補佐
堀内 秀和

コーチやレフリー、セーフティアシスタントがプレーヤーに与える影響はとても重要だと考えます。さまざまな現場の声を定期的に収集・分析し、JRFUとしてどのような取り組みが全体の「質」の向上に結びつくのかを追求し、施策の実行へと繋げてまいります。

活動報告③

普及育成ポータルサイト「みんなでラグビー」を起点とした情報発信の強化

普及育成部門はこれまでの100年という長い歴史を支えて下さった皆さまへの深い感謝とともに、次の100年を共創する「未来のラグビーファミリー」を増やすための基盤として、情報発信のあり方を大きくアップデートしました。その象徴となるのが、2025年1月5日にリニューアルしたポータルサイト「みんなでラグビー」です。単なる情報掲載の場ではなく、全国のラグビーファミリーと「今」を共有し、共に盛り上がるためのプラットフォームとして活用を強化しています。

これまでの「協会からのお知らせ」というスタイルから一歩踏み出し、ラグビーに関わるすべての人が主役となる発信を目指しました。例えば、SNS連動で全国の活動を可視化する「#みんなでラグビー」により、現場の熱量をリアルタイムに発信します。また、近隣の体験会やイベントを即座に探せる検索機能や、初心者にも分かりやすい年齢別のルール解説・比較表を導入。デジタルを通じた情報発信の強化で、誰もがラグビーを身近に楽しめる環境を構築し、関係人口のさらなる拡大を推進してまいります。

Voice

情報の力で、ラグビーをより身近なスポーツへ

普及育成部門
部門長補佐
山崎 貴志

「みんなでラグビー」のリニューアルはきっかけに過ぎません。大切なのは皆さまと熱量を共有し続けることです。同時に、まだラグビーを知らない方々へも魅力を届け、次の100年も「ラグビーが世界一身近にある国」を目指します。

2026年度運営方針

プレーできる環境構築：X-エリア ユースラグビーの開催拡大と各種大会のフォーマット見直し・ジュニア世代に適切な安全対策・競技規則の見直しまで含めて実施
支える人材育成：セブンス講習会、S&C（筋力・身体調整）講習会を新たに追加・スタートコーチは無償化対応を推進
ラグビーに触れる環境構築：普及育成のHP・SNSを活用した情報を発信し、ラグビーウェルビーイング活動「ポジラグ For All」の認知度を拡大
普及の体制構築：最大3名のRDOを増員予定・エリア会議を年間5会場で実施。各都道府県の普及育成戦略策定を行い進捗状況モニタリング

中期戦略計画2025-2028

成長サイクル 関係人口の拡大

関係するPillar

女子ラグビー

女性がラグビーを生涯スポーツとして楽しめる環境づくりを目指す

事業遂行責任者
女子ラグビー担当（DOWR）
香川 あかね

MISSION

1 女子ラグビー中長期戦略計画で定めた方針、持続的なパスウェイ構築、コミュニティ構築、リーダーシップ育成を達成すること

2 日本代表15人制・7人制の競技力の向上に寄与し、国際大会（RWC・オリンピック）での活躍をステークホルダーの共感につなげ、永続するスポーツとしてさらに成長を目指すこと

中期戦略計画2025-2028 初年度の総括

RWC2025イングランド大会を機に女子ラグビーの独自ブランディング推進のスタートダッシュを切る

8月に開催された女子RWC2025イングランド大会において、競技面では思うような結果を得られませんでしたが、女子ラグビーの独自ブランディングに合わせて実施したプロモーションによって、平均入場者数と視聴者数は大幅に増加しました。女子ラグビーの愛称である「サクラフィフティーン」の認知度向上は顕著であり、来年度以降さらなるファン拡大に向けて推進していきます。

競技環境では、近隣県協会同士の交流活動を開始しております。今後は交流活動を全国に拡大させつつ、各年代の大会レギュレーション変更含め、女子ラグビー関係者が安心して長くラグビーに携われる環境づくりを進めていきます。

重要業績評価指標（KPI）	2028年度末目標	2025年度実績	進捗	サマリ
近隣県同士の交流活動	12地域で実施	**3地域で実施**	○	**全都道府県協会理事長から希望する交流活動のヒアリングを実施。要望が多かった交流活動を、関東・関西・九州の各地域において実施。**
平均入場者数（日本代表戦）	5,000人	**3,822人**	○	**RWC2025イングランド大会の機会を活用し、女子ラグビーのブランディング訴求、男子代表戦チケット観戦者は女子代表戦半額などの男子ラグビーと連携したプロモーションを実施し、入場者数を昨年比で大幅に増加。**
平均同時視聴者数	800人	**541人**	○	**JRFUのYouTubeチャネルに「Girls Rugby Channel」にて試合以外のコンテンツ配信を強化。太陽生命WSSの認知度向上、BS日テレで初めて女子日本代表戦がライブ中継されており、今後地上波での露出に向けて取り組みを進める。**
三支部協会・都道府県協会女性理事数	各都道府県に1名	**25人**	△	**現役選手向けのキャリアセミナーを複数回実施。OG選手の講話、金融経済教育セミナーなど、持続的にラグビーに携わりやすい環境づくりを進める。 この他、三支部集中会議で議論するなど、啓蒙活動を継続している。**

中期戦略計画2025-2028

関係するPillar

女子ラグビー

活動報告①

ラガールつながる『九州ガールズラグビートーク』

「近隣県交流活動」の一つとして、2025年度は、日本の女子ラグビーを担う次世代人材育成を目的に、九州協会女子委員会と協力して、九州・沖縄で活動する女子中高生ラグビー選手を対象としたオンライントークセッションを開催しました。

九州出身の日本代表選手、レフリー、チーム運営者など、ラグビーとどのように向き合ってきたのかなどをお話しいただき、ラグビーを継続することへのモチベーションが高まったと思います。また、九州・沖縄地域内の中高生女子ラグビー選手同士の交流の場を設け、繋がりを創出することもできました。

参加者にとって、先輩方から目標設定や強みを作ること大切さを知るきっかけとなるなど、大変有意義な活動となりました。

Voice

いつまでもラグビーを楽しむために

九州協会 事務局
嘉副 人文

若い選手にとって、選手以外の役割でラグビーに携わる姿はまだ想像しにくい面があると思います。本事業は選手以外の多様な関わり方についても考えてもらうきっかけの一つになりました。いつまでもラグビーを楽しめるよう、広い意味での競技継続につなげていきたいです。

活動報告②

「女性ハイパフォーマンスコーチアカデミー」

このプログラムは、世界で活躍できる女性指導者の育成を目的に展開しています。

内容は、コーチング実践やグループディスカッション、1on1面談を通じて、自身の指導を振り返り、課題の明確化、アウトプット重視、そして実践からの学びを深める点が特徴です。また、セブンズユースアカデミーなど、インターンコーチとしての実践機会を積みながら学びを深化させています。

対話とフィードバックを重ね、自己認識力や意思決定力、場づくりの質を高め、主体的に学び続ける指導者を育成します。学びを言語化し、共有することで再現性のある知見へと昇華させ、選手への価値提供へとつなげることも重視しています。近い将来、国際舞台で通用する実践力と人間力を兼ね備えた指導者の輩出を目指します。

Voice

世界で活躍できる次世代女性指導者の育成

代表強化部門　宮﨑 善幸

本アカデミーを受講された女性指導者がセブンズユースアカデミーコーチおよび15人制女子チームマネージャーなどに配置され、世界と勝負する人材として成長しています。女性ハイパフォーマンスコーチの活躍の場が更に広がっています。

2026年度運営方針

パスウェイ構築：近隣県同士の定期的な交流活動を今年の3地域から6地域に拡大。実現にあたり年間スケジュールを早期に確定・チームへ連携

コミュニティ構築（集客）：100周年テストマッチに合わせて女子ラグビーのブランディング発表。JAPAN RUGBY IDを活用した集客施策の立案・実行による来場者増加

コミュニティ構築（情報発信）：女子ラグビーに特化したオウンドメディアを活用した定期的な情報発信を強化。太陽生命WSSのライブ配信機能向上による魅力を向上

リーダーシップ育成：都道府県協会理事長会議等で女性理事数増加への呼びかけしつつ、選手へのキャリアセミナー開催や女性コーチのパスウェイを強化と連動して実現

中期戦略計画2025-2028

成長サイクル **基盤強化**

関係するPillar

組織基盤

組織の高度化と共に、生産性と効率性の向上を同時に進める

事業遂行責任者
総務担当（COS）
中里 裕一

MISSION

1 職員のスキルレベルの向上・職場環境整備の他、業務プロセスの改革を行い、プロフェッショナル組織として高いエンゲージメントと生産性を引き出すこと

2 支部協会・都道府県協会、リーグワン、ジャパンラグビーマーケティング、自治体などの外部ステークホルダーとの連携を強化し、同じベクトルのもと、持続可能なラグビー発展のエコシステムを構築すること

中期戦略計画2025-2028 初年度の総括

人材戦略を刷新し、さらなる生産性向上を推進し、次の成長フェーズへ

2026年で100周年を迎えるJRFUの職員数は現在100名を超える規模に成長しており、各部門・各人の役割分担・業務生産性の重要性が増しております。それに伴い、人材戦略を今年刷新し、「仕組みの整備・透明性向上」「エンゲージメントの向上」「人材の基盤構築」を重点項目として設定しました。RWC再招致を見据えて、都道府県協会・自治体の連携する取り組みを拡大していきます。

今後は、JRFU職員・都道府県協会へのエンゲージメント調査などをもとに定点観測・効果測定を行い、日本ラグビーを支える基盤を持続可能なものへ成長させていきます。

重要業績評価指標（KPI）		2028年度末目標	2025年度実績	進捗	サマリ
1人あたりの経常収入		85百万円	**68百万円**	△	**収入予算未達により、年度目標は達成できず。**
全国都道府県協会の収入額		100百万円増加	**29百万円増加**	◎	**当年度の結果は各協会の独自の努力による成果であり、当協会としては都道府県協会の財源確保のためのサポート対策を検討し、計画化した。**
自治体と都道府県協会との連携事業の事例数		47件	**10件**	△	**未就学児向けプログラム、RWC2025イングランド大会のパブリックビューイングを男女代表戦開催自治体と連携して実施。事例紹介・ヒアリングを行い拡大を狙う。**
自治体ワンチーム加盟数		全都道府県加盟	**6自治体**	○	**代表戦時や各種JRFUイベントをきっかけに自治体ワンチームへの加盟促進を行い複数の自治体加盟を実現。**
エンゲージメント指標の肯定率	JRFU	50%	**31%**	△	**今回のサーベイ結果を検証し、対応策を継続している。**
	都道府県協会	50%	**50%**	○	**既に肯定率は50%を達成しているが、この水準を維持、向上していくことを目指す。**
不祥事		0件	**5件**	△	**研修などの取り組みは継続的に実施した。**

中期戦略計画2025-2028

関係するPillar

組織基盤

活動報告①

JRFUの人材戦略刷新

JRFUは「制度構築から運用深化への挑戦」へ舵を切り、次の成長フェーズに向けて人事戦略を刷新しました。本戦略は「制度・意識・生産性」の3層が連動するスキームです。

その目的は、単なる管理組織から「価値創造組織」へと進化することにあります。正職員による経営基盤を確立し、策定した「成長体系図」の遂行で、職員一人ひとりの専門性と主体性を喚起して個人の成長をラグビー界の発展へ直結させます。また、多様性を尊重し、誰もが強みを発揮できるインクルーシブな組織風土を醸成します。

この変革の成果として、業務効率化で育んだ力を日本ラグビーの成長へ再投資して、持続的な成長サイクルを確立します。協会組織自体が「世界一」を目指せる仕組みと環境を構築し、一丸となって次の成長フェーズへ挑戦します。

Voice

JRFUが求める人材像
ーJRFU Attitudeー
を全職員で実践

人事部門
部門長補佐
船曳 典久

次の成長フェーズの達成のため、私たちは「JRFU Attitude」を掲げました。「インテグリティ」「プロアクティブ」「ニュートラル」「チャレンジ」「グローバル」の5項目で構成されており、これらに共感し、体現できている人材が、正職員として経営基盤の中核を担います。

活動報告②

3団体共同ワークショップの開催

本施策は、JRFU、JRLO、JRMの3団体が共同し、日本ラグビーの100周年事業の一環として、職員全体の相互理解と連携を深め、ラグビー協会の課題解決への具体的なアクション創出を目的に国立競技場で開催されました。協会とリーグそして事業会社が一同に集まり、組織の未来を議論する取り組みは日本スポーツ界では珍しい取り組みとなりました。参加者111名は事前に「ラグビーで実現したいこと」を「想いシート」に記入し、「強化」「マーケティング」「普及」「女子ラグビー」「社会価値」などのテーマに基づき活発な議論を実施。選手・レフリーなどによるパネルディスカッションやグループ討議が実施され、事後アンケートでは約86%が全体を通じて「学び・気づきを得た」と回答しています。また、約85%が継続開催を希望しており、組織の垣根を超えた交流の場として高い評価を得ました。今後は「具体的なプロジェクトの立ち上げ」への期待が高まる一方、コアとなる新たな収益事業の確立や社会価値の創出など、議論の深化や早期対処への必要性が明確となりました。

Voice

フロンティアな取り組みでラグビー界のゲームチェンジに大きな期待

CEO付100周年事業
社会価値創出PJマネージャー
内山 浩文

これまで、3団体が組織横断で想いを共有する機会はなく、まさに「100周年」らしさを感じる1日でした。職員の一つ一つの想いがカタチになれば、ラグビーやスポーツ界をリードし、社会変革の主体者“まさに革新的な組織”になれると確信しております。

2026年度運営方針

プロフェッショナル組織としての環境整備：共通・選択型研修の採用/業務効率化ツールの集約・活用するまでのフォローアップ
三支部協会・都道府県協会との連携：地域エコシステムサポートのモデルケースを3つの県協会で確立する
ステークホルダーとの連携：RWC再招致を見据え、JRFU主催試合の開催自治体との連携アイデアを自治体・都道府県協会へ提案し、取り組み事例を増加させる

中期戦略計画2025-2028

成長サイクル **基盤強化**

関係するPillar

財務基盤

安定的かつ健全な財源積み上げを実現するための予算管理を推進

事業遂行責任者
財務担当（CFO）
重 博人

MISSION

1 未来への投資に向けた財務基盤を確立すること

2 一般正味財産（純資産）の健全な積み上げを実現すること

中期戦略計画2025-2028 初年度の総括

赤字8.5億円という厳しい結果をJRFUワンチームになり、対策を講じていく

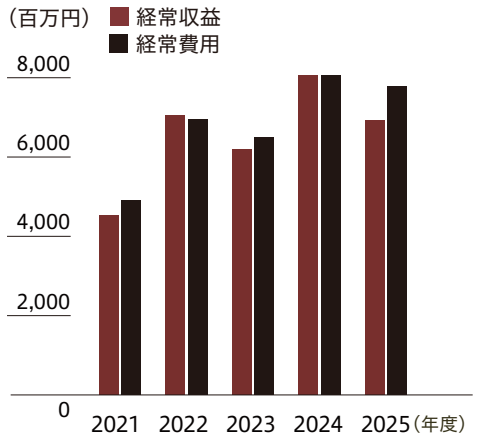
重要業績評価指標（KPI）	2028年度末目標	2025年度実績	進捗
一般正味財産の積み上げ	10億円以上 （単年度2億円以上）	−8.5億円	△

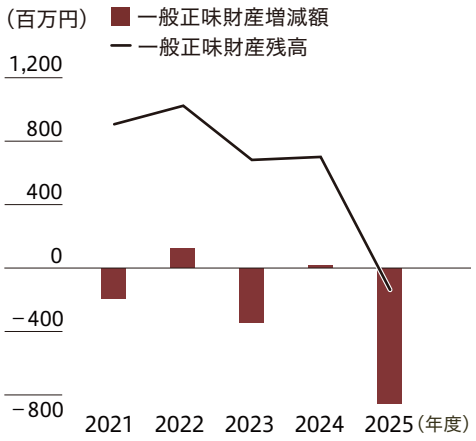
2025年度のJRFU決算は経常収益が約69億円、経常費用が約78億円、一般正味財産増額が約-8.5億円と大幅な赤字となりました。主な原因として事業収益の大幅な減少、物価高騰、為替の影響による支出拡大、過大な収入予算をもとにしたことによる予実のギャップの大きさなどが上げられます。

収益アップのために代表コンテンツ価値を活用した収益軸の強化、代表強化コストの活用方法の見直しなど、コスト削減を他Pillarと連動して取り組んでいく必要があります。

財務基盤として、特にJRFU全体の予算策定・予算管理への意識づけに注力する必要があります。具体的には四半期ごとの定期報告と意見交換を行い、予実ギャップの有無を早期に検知し、対策を行うサイクルを徹底していきます。また、支出ガイドラインを策定し、経費削減にも努めていきます。

経常収益と一般正味財産残高の推移（年度別）





中期戦略計画2025-2028

関係するPillar

財務基盤

2035年のRWC再招致実現に向けて、財務基盤の健全化は重要な課題であり、JRFU全体でワンチームとなり、立て直しを図っていきます。

2025年度の決算結果を踏まえ、2026年度は確実に単年度黒字化を達成できるよう、達成確度の高い協賛金やチケット収入をベースとした「収入予算の適正化」を図り、その収入枠の範囲内で各事業の支出予算を策定致しました。

今期は、15人制男子日本代表のネーションズチャンピオンシップ2026への参加や国内における日本代表戦の増加などに伴い、収入予算は83.4億円へと拡大しております。これに連動して支出予算も増加致しましたが、収入の範囲内である83.2億円にとどめ、0.2億円の黒字を確保する予算計画としております。

事業規模が拡大する局面において、タイムリーな進捗管理と厳格なコストコントロールを徹底していく必要があります。

本収支計画を確実に遂行するため、今期は以下の3つの方針を定め、取り組みを推進してまいります。

1. 予算管理体制の見直し

2025年度の赤字要因として、予算と実績の管理が十分に機能していなかった点が挙げられます。JRFUは構造上収益を生み出す事業が「エンゲージメント領域」に偏在しており、同領域で創出された収益が他のPillarの財源となる循環構造にあります。

そのため、エンゲージメント領域におけるトップライン収益の悪化や、各Pillarで突発的な支出が生じた場合には、全体予算を迅速に見直す必要があります。見直しにあたっては事業の優先順位を明確にし、収入の範囲内で実施可能な事業に集中する判断を徹底していきます。

2. 事業拡大や法改正へ対応した適正な会計処理の継続と追求

収支改善へ向けた取り組みの土台となる、適正な会計処理を継続してまいります。

直近の公益法人制度改革に伴う法改正や、公益法人会計基準の動向を迅速に捉え、事業拡大に伴い各取り引きが複雑化・多様化する中にあっても、各種法令に準拠した適正な処理を行うための情報収集体制の構築や、チェック機能の整備・効率化に注力してまいります。

3. 投資事業における効果検証の推進

JRFUは、ジャパンラグビーマーケティングへの出資や、JAPAN BASEへの設備投資など、これまで積極的な投資を行ってきました。今後は、これらの投資に対する財務、普及、強化、ファン拡大など、あらゆる面での効果検証や回収を本格的に追求するフェーズに入ります。

今期は、検証結果を次期以降の予算配分や新たな投資判断へ迅速にフィードバックする仕組みを構築し、限られた原資から最大の効果を創出してまいります。

2026年度は、JRFU創立100周年という節目であると同時に、RWC2027オーストラリア大会の前年にあたる極めて重要な年です。この一年では、改めて「ラグビーの価値とは何か」を問い直し、目標達成に向けて、一つひとつのアクションアイテムを着実に実行してまいります。

2026年度運営方針

精度を高めた予算作成：当年度の見通しについて定期的なレビューを行い、実績をベースとした来年度予算を作成

主体的な財務管理：四半期ごとの定期報告を徹底し、各Pillarの予実管理をリアルタイムで把握。必要に応じて予算の見直しを期中で実施できるサイクルを確立

既存システム：現在のシステム機能を十分に活用できるように検討。必要に応じてシステム改修を実施

支出ガイドラインの作成・運用の徹底：経費の基準・経費精算フローなどの見直しを実施

Close Up!

JRFUでは、強化や普及育成などのラグビー事業とは別に、日本ラグビーを支えるため、未来に繋げるため、ラグビーの価値を高め、広め、伝えていくために、さまざまな事業に取り組んでいます。

WEB 環境サステナビリティ活動報告書はこちら
WEB 試合会場での活動はこちら

環境サステナビリティ推進活動

興行時におけるCO_2排出量測定

JRFUでは、2024年10月に環境サステナビリティ推進宣言の上、国連の「スポーツを通じた気候行動枠組み」に署名しました。

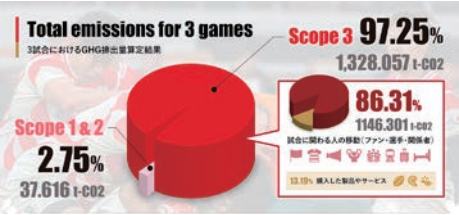
また2025年4月に「環境サステナビリティ取組方針」を策定・公表しました。2025年度は具体施策の一つとして、当協会初となる試み「日本代表戦試合会場におけるCO_2排出量算定・現状把握」を行いました。会場規模や地域性を考慮し、算定対象として3会場を選定しました。

対象試合

- 6月28日　秩父宮ラグビー場
  リポビタンDチャレンジカップ2025
  「JAPAN XV vs マオリ・オールブラックス」
- 8月30日　ユアテックスタジアム仙台
  パシフィックネーションズカップ2025
  「日本代表 vs カナダ代表」
- 10月25日　国立競技場
  リポビタンDチャレンジカップ2025
  「日本代表 vs オーストラリア代表」

算定結果の概要

2025年度3会場におけるCO_2排出量は、合計1365.673t-CO_2でしたが、その80%以上がファン・選手・関係者など、試合に関わる「人」の移動が主要因であることが分かりました。



排出量の削減へ向けて

「人」の移動がCO_2排出量の主要因でしたが、単純に排出量を減らそうとすると、来場者数を減らさなくてはいけないという、大きな矛盾に直面することとなりました。「ラグビー競技の普及と強化」と、「環境サステナビリティへの貢献」を両立するためには、多くのお客様に来場いただきながら、移動の方法を、排出量の少ない「グリーンモビリティ」を中心にしていただけるような働きかけが必要となります。その実現に向け、ラグビーファミリーの環境サステナビリティに関する認知拡大・行動変容につながる活動を今後も引き続き推進していきます。

開催自治体と連携したブース出展

JRFUでは「環境サステナビリティ取組方針」において、スポーツ/ラグビーならではの啓蒙活動に重点を置いています。

2025年度は具体的施策の一つとして、男女日本代表戦8試合の会場にて、開催自治体と連携した「環境ブース」の出展を行いました。SAF（持続可能な航空燃料）の原料となる使用済み食用油の回収、フードドライブを通じた食品ロス削減、アーバンネイチャーや生物多様性保全に関する啓発など、さまざまな取り組みを展開しました。

具体的な実績

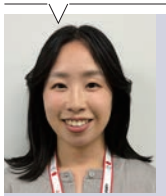
- **使用済み食用油の回収：計78.5ℓ**

使用済み食用油から作られるSAFは、従来の化石燃料に比べCO_2を80%削減すると言われています。東京都環境局様と神戸市環境局様のご協力のもと、来場者の皆さまに持参いただいた油を回収しました。特に神戸会場では、市内に常設中の全回収場所での回収量約4日分（21.5ℓ）を記録しました。

- **フードドライブ寄贈量：6.8kg**

仙台市環境局様のご協力のもと、来場者の皆さまより米・乾麺・缶詰などの食品をご提供いただきました。

Voice



さまざまな人と繋がり
共に高めていきたい
「ラグビーの価値」

業務推進部門　野本 葵

環境サステナビリティに関する活動は、ラグビーの価値を高める上で重要な要素の一つです。これからもさまざまなステークホルダーやラグビーファミリーの皆さまとつながり、一緒に「ラグビーの価値」を高める活動を推進してまいります。

Close Up!

WEB JRFU基金はこちら
WEB スクラム・ジャパン・プログラムはこちら

JRFU基金

ジャパンラグビーを応援して下さる皆さまの「ご芳志の受付機能」として

2014年度に開設した本基金は、以下の目的を掲げて寄附を受け付けています。

・JRFUの活動全体への協力
・ラグビーの普及と育成活動への協力
・日本代表チームの一層の強化

これまで多くのご寄附をいただき、そのご資金を活用してきましたが、協会創設100周年を迎えるタイミングで、次の100年につなげられるよう、「特製返礼品」の見直しを行いました（2026年4月より）。

公益財団法人としての税制上の優遇措置や遺贈に関する相談窓口も是非ご活用いただき、ステークフォルダーの皆さまとご一緒にJRFUが進めるミッション、ビジョン、ターゲットの実現に向けて、ラグビーの価値をさらに高められるようご支援・ご協力をお願いします。

ラグビーが、世界一身近にある国へ
JRFU基金

スクラム・ジャパン・プログラム

各地域のラグビー協会の「ハブ」として

ラグビーを通じて、青少年の心身を育み、将来、各界で活躍する人材輩出に繋げることを目的に、2013年に創設されたプログラムで、毎年、協賛会員様からいただく年会費を全国の地域ラグビー協会の普及・育成活動に活用するという「社会連携のハブ」となることで、価値を高めてきました。これまでご支援をいただいた企業様、また普及活動にご協力をいただいた関係者の皆さまに心より御礼申し上げます。

2025年度は50社の企業様からご支援をいただき、助成金活用として31都府県にわたる地域のラグビー協会から70件を超える申請があり、自ら企画・実施するさまざまなラグビー普及活動の一助として活用することができました。

また、会員特典の一つ「ロゴマーク」の活用による「スクラムバナナ」のご寄附もラグビー普及につながる大切な資金としてご支援をいただきました。地域のラグビー協会は、関係者のボランティア活動によって成り立っている現状からも、普及活動の財源としてご協力をいただきました。この他、施設利用の無償提供によるご支援もいただき、ラグビー体験会を7件実施することもできました。

今後も会員企業様との連携やリソースを活用した取り組みをさらに加速させて、ラグビーそのものが有する価値を広く知っていただき、社会課題の解決に繋がるよう、質と量ともに高めていきたいと考えています。

毎年開催している「協賛会員ミーティング」では、本プログラムの活動報告とともに、会員企業様同士の交流の場として活用していただいております。2025年度は、東京地区での開催に加えて、初めて関西（神戸、3月20日、5社9名様がご参加）においても開催しました。ラグビーを通じた“ご縁”も本プログラムの価値ある特徴として捉えて、より多くの企業様からご賛同をいただけるよう努めてまいります。

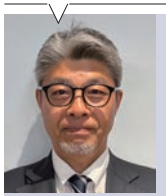
協賛会員ミーティング（東京）にご参加いただきありがとうございます！

郡山市開成山公園でのラグビー体験会イベント

ホームページにおいて、これまで各地域で開催されたスクラム・ジャパン・プログラムの活動レポートやご協賛いただいている企業様の情報を掲載しています。

子どもたちのため、このスクラム・ジャパン・プログラムの輪が大きくなりますよう、皆さまのご支援をお願い致します。

Voice



ラグビーの価値を高める活動へのご支援に感謝致します！

業務推進部門　三上 尚人

ラグビーの普及・育成を通じた社会貢献活動として多くの企業様・団体様から賛同をいただいているスクラム・ジャパン・プログラムと、ジャパンラグビーを応援して下さる皆さまのプラットフォームとして、より一層価値を高めてまいります。

Close Up!

WEB R+MED基金はこちら

ラグビー重症外傷への最先端医療推進支援基金

日本スポーツ界として初のチャレンジ

この活動は、RWC2019日本大会の翌年に設置されたレガシー特別実行委員会としてスタートしました。2021年から3年間、慶應義塾大学医学部と札幌医科大学へ研究助成を行い、2023年10月にはラグビー競技における脊髄損傷への再生医療適応プロジェクトの研究発表会を開催しました。

2025年4月、正式に基金が設立されました。当基金は、ラグビー競技の健全なる発達と、社会文化の向上発展に寄与することを目的に、スポーツ界における最先端医療への研究支援推進の機運を醸成し、重症外傷が発生した際に、選手が最先端の医療を受けるためのネットワークを構築することを目指して、次の5つの事業に取り組んでおります。

(1)最先端医療に関わる情報提供
(2)研究支援
(3)関係団体との連携
(4)搬送支援システムの構築
(5)寄附、協賛、チャリティ活動

RWC2019日本大会のレガシー、日本スポーツ界として初のチャレンジです。

ラグビー重症外傷への最先端医療推進支援基金 R+MED基金 JAPAN RUGBY

活動レポート

VOL.1　第10回ラグビードクターカンファランスにおいて講演(6月14日、福岡)

基金の目的や活動内容などについて、河野一郎氏(JRFUレガシー特別実行委員会 委員長)からご講演いただきました。

VOL. 2　国際試合会場において初めてブースを出展(6月28日、秩父宮)

この試合に合わせて、ホームページを新設し、オンライン寄附サイトを構築しました。その後もテストマッチ(10月、国立)、全国高校大会(12月、花園)、全国大学選手権(1月、国立)、女子選手権(2月、秩父宮)において、ブースを出展しました。

各会場では、アスリート委員会のメンバーの皆さまにもご協力いただきました。

VOL. 3　ラグビー競技において重症外傷を負われた当事者との面談を実施

5名の受傷当事者やご家族とお会いして、当基金の活動を紹介するとともに、今後の活動のあり方などについて、受傷者視点から大変貴重なご意見をいただきました。

現在は、脊髄損傷事故が発生した際、再生医療適用などに関わる情報提供を行うサポートデスクの設置に向けた準備を進めています。また、2023年度以来となる医療支援を再開すべく、その原資となる寄附金の目標額を300万円に設定し、試合会場でのブース出展などを行っていきます。

基金残高について

2025年度の活動収支および基金残高についてご報告致します。　(単位　円)

期初残高		200,000,000
収入	オンライン寄附	453,000
	会場募金	401,816
	合計	854,816
支出	情報提供	0
	医療ネットワーク	0
	研究支援	0
	普及啓発活動など	1,141,403
	合計	1,141,403
期末残高		199,713,413

今後も当基金の主旨に沿って、有効に活用してまいります。

Voice

ラグビーファミリー全員で選手を支える活動へ

リスク・ガバナンス室長
鈴木 海太

2026年度は引き続き、一人でも多くの方に、R+MED基金の取り組みを知って頂くことに傾注します。この活動の核心は、「ラグビー界全体で進める」「ラグビーファミリー全員で選手を支える」に尽きると思っています。強い信念をもって取り組みます。

支部報告

関東協会

会長　伊藤 隆

2025年度も、17都道県協会の皆さまと共に、ラグビーの普及、発展に努めてまいりました。

秋の大学ラグビーでは、対抗戦、リーグ戦全56試合の観客数も、14万人台を維持できております。また、トップイーストリーグ（9月-12月）、菅平ミニラグビー・ジャンボリー交流大会（7月）、東日本ラグビーフットボール大会（栃木・福島、11月）、第23回東日本U15中学生ラグビーフットボール選抜大会（水戸、3月）も例年通り実施致しました。

ご関係者の皆さまのご協力に、心より感謝申し上げます。2026年度もご支援を賜りますようお願い申し上げます。

WEB 本年度の試合結果はこちら

関西協会

会長　萩本 光威

関西協会では創立100周年事業として、2025関西セブンズフェスティバル、第18回関西ミニ・ラグビージャンボリー交流大会、東西学生対抗戦、創立100周年記念式典を執り行うことができました。

それぞれの事業に携わっていただいた皆さまへ心より感謝を申し上げます。

引き続き、関西協会の「次の100年」を目指して、選手・スタッフ・チーム、管下22府県協会の皆さまと共にラグビーの発展に努めてまいりますので、皆さまのご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

WEB 本年度の試合結果はこちら

九州協会

会長　久木元 孝行

2025年度は事業計画に沿って大会やイベントを順調に実施することができました。特に第1回 Kyushu Spring Championship 2025は、シニアカテゴリーの強化、レフリーの育成を目的に実施し、大きな成果を上げることができました。また、課題である競技人口減少対策として親子ラグビー体験会を実施し、さらには九州普及プロジェクトを立ち上げ、全カテゴリーの競技人口減少対策に取り組む準備を始めました。2026年度は、さらなる飛躍の年となるよう努めてまいりますので、皆さまのご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

WEB 本年度の試合結果はこちら

3章 ガバナンス

38 コーポレートガバナンス
39 ガバナンスコードへの対応
40 コンプライアンス・インテグリティ
41 スポンサー

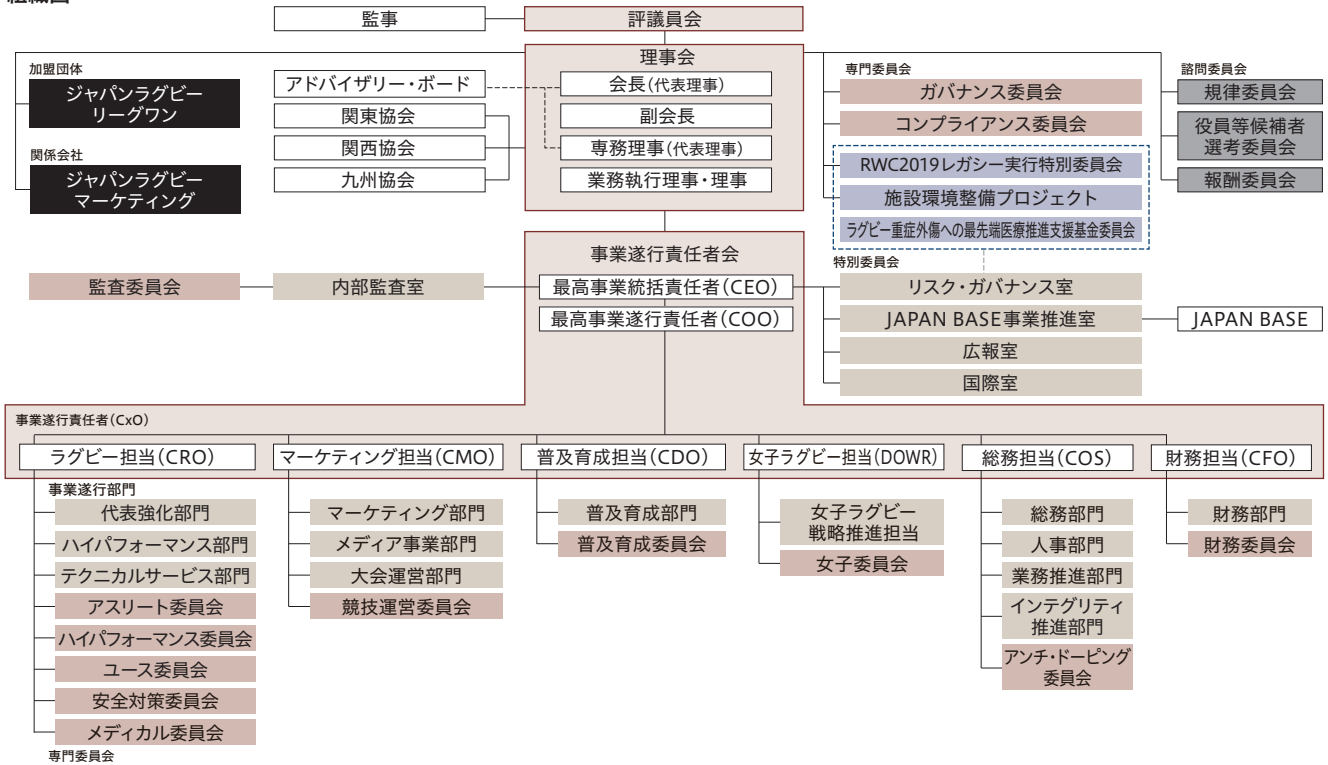
コーポレートガバナンス

JRFUでは、より迅速な意思決定を図ることを目的に、2020年7月、理事が担当領域を持つ担当理事制と事務局を廃止し、業務の監督（理事会）と執行（事業遂行部門）を分離した体制としております。

この体制に関する基本的な考え方として、理事会は法令上必要な事項と重要な業務執行を決定し、その執行を監督します。決定された業務は、その執行を担当する理事および業務遂行理事を含む事業遂行部門がそれを執行します。各委員会については、それぞれの機能に基づき、位置づけを明確にすべく、特別・諮問・専門の3委員会に区分しています。意思決定・業務執行・業務の監督という協会全体の機能の観点から、執行に関わる委員会は事業遂行部門に、監督に関わる委員会は理事会に紐づく組織体制としています。

これらの考え方に沿った上で、業務執行理事の権限を明確にするとともに、事業遂行責任者会として、事業遂行各組織（部門・室）を管掌・統括する事業遂行責任者を配置しています。

組織図



役員一覧

会長（代表理事）	土田 雅人
副会長	浅見 敬子　木下 康司　清宮 克幸　水越 豊
専務理事（代表理事）	岩渕 健輔
会計役	鈴木 彰
理事	Mark Egan　石原 直子　江田 麻季子 香川 あかね　御領園 昭彦　斎木 尚子 境田 正樹　座間 美都子　玉塚 元一 中島 誠一郎　中村 明彦　浜本 剛志 三好 美紀子　安田 結子　山神 孝志
監事	打田 光代　袖山 裕行

（五十音順）

事業遂行責任者会（＊は理事）

最高事業統括責任者（CEO）	山神 孝志*
事業遂行責任者	ラグビー担当（CRO）山神 孝志（兼） マーケティング担当（CMO）牧 健 普及育成担当（CDO）安井 直史 女子ラグビー担当（DOWR）香川 あかね* 総務担当（COS）中里 裕一 財務担当（CFO）重 博人

組織図、役員一覧、事業遂行責任者会は2026年3月31日時点のものです

ガバナンスコードへの対応

2025年度自己説明

不祥事の発生を防ぎ、スポーツの価値を一層高め、スポーツ団体の適正なガバナンスを確保するため、ガバナンスコードが定められています。中央競技団体では13原則43項目について、毎年１回の自己説明を実施することが求められ、４年に１度、適合性審査が実施されており、JRFUは2022年度に受検し、適合の評価をいただいています。

ガバナンスコード対応に向けて取り組むことで、現時点の不安要素が把握でき、未然防止に向けた取り組みを行うことが可能になります。ラグビーの価値を一層高めるため、ガバナンスコードへの対応はそのスタートラインに立ったに過ぎません。真摯にかつ忠実に取り組むことが重要であると考えています。

WEB 「遵守状況の自己説明」はこちら 2025年10月8日更新

JRFUにおける自己説明対応

2025年度の自己説明に際しては、2026年度に予定されている適合性審査に準じて、委員会や各種研修の実施状況や議事録や名簿などの証憑資料などを確認しながら対応しました。ラグビーの価値を高めるためのスタートライン、少しでも高い位置に立てるよう、真摯に愚直に取り組みを継続しました。

適合性審査について

中央競技団体に対しては、4年に1度、ガバナンスコードの適合性審査運用規則に基づき、統括３団体（日本スポーツ協会、日本オリンピック委員会、日本パラスポーツ協会）による適合性審査が実施されています。統括３団体は適合性審査結果をスポーツ庁が運営する円卓会議へ報告し、結果を各中央競技団体へフィードバックするスキームとなっています。

ガバナンスコード〈中央競技団体向け〉の13原則

原則１	基本計画の策定・公表	中長期基本計画・人材計画・財務計画の公表など
原則２	役員等の体制整備	女性理事の割合・役員の新陳代謝を図る仕組みなど
原則３	必要な規程の整備	代表選手の権利保護、審判員の公平な選考など
原則４	コンプライアンス委員会の設置	コンプライアンス委員会に弁護士等の有識者を配置など
原則５	コンプライアンス教育の実施	職員・選手・指導者・審判員向けの教育実施など
原則６	法務・会計等の体制の構築	会計原則の遵守、補助金の適正使用など
原則７	適切な情報開示の実施	財務情報・選手の選考基準の開示など
原則８	利益相反の適切な管理	職員・選手・指導者間の利益相反管理・ポリシー作成など
原則９	通報制度の構築	通報窓口を設けて、相談内容に守秘義務を課すことなど
原則10	懲罰制度の構築	禁止行為、処分対象者・処分手続／内容を定め周知など
原則11	紛争の迅速かつ適切な解決	スポーツ仲裁機構の利用が可能であることを処分者へ通知など
原則12	危機管理・不祥事対応体制の構築	マニュアル作成、不祥事発生後の調査体制構築など
原則13	地方組織等への指導・助言・支援	地方組織との権限関係の明確化・支援体制の確立など

コンプライアンス・インテグリティ

基本的な考え

インテグリティはラグビー憲章内でもうたわれる価値観であり、ラグビーに関わるすべての人々に共有されるべきものです。コンプライアンス、アンチ・ドーピング、安全・安心なラグビー環境整備の観点で改善を繰り返し、インテグリティ向上に努めています。

発生事例について

事例および通報件数

2025年度は「倫理及び処分規程」に基づく処分が5件（6人）ありました。また、インテグリティ相談窓口への通報を含めた相談件数は60件あり、そのうち約60%が暴力・ハラスメントを原因としたものとなっています。また、事案が発生したカテゴリーとしては、2024年度に引き続き、ラグビースクールにおけるものが多くなっています。さらに、大学カテゴリーにおいても違法薬物問題や未成年飲酒に関わる問題が発生しており、JRFUとしてはいずれも重大な課題と捉えております。

直近5年間の処分件数の推移

年度	2020	2021	2022	2023	2024	2025
件数	2	2	3	8	1	5

※上記件数は、相談窓口等に寄せられた事案から事実調査、処分審査を経て理事会で決議した処分件数の推移になります。事案発生から処分に至るまで年度をまたぐケースも多くあります。

ドーピング検査

公益財団法人日本アンチ・ドーピング機構（JADA）と連携し、合計68検体を採取し競技会検査を実施しましたが、国内のラグビー選手に対するドーピング検査で陽性例はありませんでした。

安全対策への取り組み

「安全なラグビーの実現」「重症事故ゼロ」を目標に、さまざまな取り組みを行っています。ラグビーにおける安全管理の重要性を指導者、プレーヤーに理解してもらい、日々の練習、試合および日常生活において実践するように促しています。

また、登録する約2,600チームに対して安全推進講習会を実施しました。

価値基盤を形成するための各種取り組み

JRFUでは、コンプライアンス違反やドーピング陽性件数をなくすこと、安全・安心のラグビー環境を維持するための対策として、以下のような講習会や研修を講じています。

インテグリティ推進講習会の開催

登録チーム責任者、選手、指導者、保護者、都道府県協会職員など、2,485人に受講頂きました。

日本代表（男女）に向けたインテグリティ研修会

日本代表選手や指導者、スタッフに対してSNSや飲酒、社会規範などにまつわるコンプライアンス意識の向上に加え、日本代表としての資質向上を目指して実施しました。

アンチ・ドーピング研修会

対面式の研修会を中心に、eラーニング受講も合わせて、約8,600名にクリーンスポーツの講義を行いました。

セーフティーアシスタント認定講習会

登録チームのセーフティーアシスタント2,558人の方にオンライン形式にて受講いただきました。

情報発信

インテグリティ追求の情報発信

ホームページ内のインテグリティ追求ページを更新、インテグリティ追求・コンプライアンス強化に役立つ学習資料や関連情報を発信しました。

アンチ・ドーピングのアウトリーチ活動

2025年度は、国際試合、全国中学生大会、全国高等学校大会の会場内にブースを出展し、選手、指導者、保護者などを対象に活動しました。

外傷・障害対応マニュアル改訂版発行

2025年度は、傷害報告の組み合わせパターンの説明や傷害発生時の報告フローを追加した改訂版を発行しました。

選手・保護者・関係者の皆さま

JRFUではインテグリティ相談窓口を設置し、選手、指導者、保護者などからの相談に外部の弁護士が対応しています。相談内容に関して秘密を守りますので、安心してご相談下さい。

相談窓口はこちら

スポンサー

日本代表スポンサー

日本代表トップパートナー

大正製薬

男子日本代表オフィシャルパートナー

TOSHIBA　SMBC　SECOM　canterbury

女子日本代表オフィシャルパートナー

太陽生命　SMBC　SECOM　canterbury

男子日本代表オフィシャルスポンサー

三菱地所　ヒト・コミュニケーションズ　Asahi

女子日本代表オフィシャルスポンサー

三菱地所　SEINAN　Asahi

日本代表オフィシャルサポーター

JTB　KASHIYAMA　REGZA　JAPAN AIRLINES

日本代表サプライヤー

GILBERT　ZAVAS　Asahi　Hinomaru 日の丸自動車興業株式会社

JAPAN BASE スポンサー

プリンシパルパートナー

リポビタンD

オフィシャルパートナー

VENEX　DEFENDER ランドローバー福岡　JAPAN AIRLINES　パラマウントベッド　MARSOL

オフィシャルサポーター

セコム株式会社
TOTO株式会社
東芝エルイーソリューション株式会社
アサヒ飲料株式会社
有限会社ライク・ア・ウッド
積水樹脂株式会社
株式会社ユーフォリア
株式会社ソディック エフ・ティ

フレンドシップサポーター

九州旅客鉄道株式会社
九州木材工業株式会社
株式会社森硝子店
株式会社如水庵
株式会社タイセイ・ハウジー
株式会社ふくおかフィナンシャルグループ
株式会社アートヴァディジング
阪九フェリー株式会社
一般社団法人 Azure sky
株式会社 LC.池田事務所
株式会社博多ふくいち
グリーンシステム株式会社
NTTプレシジョンメディシン株式会社

JRFUプロバイダー

ぴあ

2026年3月31日時点

JAPAN RUGBY

JAPAN RUGBY ANNUAL REPORT 2025

発　行　日　2026年6月30日

発　行　者　公益財団法人日本ラグビーフットボール協会
〒107-0062 東京都港区南青山一丁目1-1
新青山ビル 東館5階

制　　作　株式会社ブレーンセンター

協　　力　EY Japan株式会社

編集後記

本レポートをお読みいただき、誠にありがとうございます。2025年度は女子RWCでのサクラフィフティーンの躍進や、新中期戦略計画の本格始動など、日本ラグビーが次なる高みへ踏み出した一年となりました。2026年の創立100周年を目前に控え、皆さまと共にこの感動をつないでいけることが、私たちにとっても喜びです。今後とも変わらぬご声援をお願い申し上げます。

「ANNUAL REPORT2025」をお読みになったご感想をお聞かせ下さい

感想はこちらから

リスク・ガバナンス室
柿ヶ野 芙美